

## 驚異へ捧げる賛辞

——ナポリ随一の文筆家ロレンツォ・クラッソに見る日本像

小川 仁

はじめに

一七世紀、イタリアをはじめとしたヨーロッパにおいて、非ヨーロッパ世界の情報を得る最も簡便な方法は、世界各地で布教活動を展開していたイエズス会士らの書簡集に目を通すことであった。イエズス会は、自らの組織の宣伝戦略の手段として、世界各地のイエズス会士から送られてくる布教報告を、イタリア語、フランス語、ラテン語をはじめ、ヨーロッパ各国語に翻訳し、出版していた。冒険商人や航海士の旅行記なども出版されていたものの、イエズス会士らの書簡集には到底及ばぬ規模であった。

そうしたなかで特異な刊行物だったのは、ナポリ出身の弁護士にして文筆家であったロレンツォ・クラッソ (Lorenzo Crasso, 一六一三—一六九二) の手による『著名武将伝賛』(Elogi di capitani illustri, Venezia, 1688)<sup>①</sup>である。クラッソは、一六〇一七世紀の世界各地の著名な武将九八名の事績を、礼賛というスタンスから評伝形式で紹介した。著作には、ほぼ同時代に活躍した日本人武将として豊臣秀吉、徳川家康の二名が、取り上げられている。報告書や旅行記形式ではなく、日本をはじめとした非ヨーロッパ文化圏の人物を、賛辞を織り交ぜた人物伝、いわゆる伝賛という形式で纏め上げた著作は、同時代では他に類を見ない。

本論文は、『著名武将伝賛』が取り上げる豊臣秀吉と徳川家康の記

述を分析することで、一七世紀中葉のイタリアにおける日本人イメーজの受容、とりわけ日本人武将に対するイメージの解明に注力する。本稿では、まず著者ロレンツォ・クラッツの生い立ち、生まれ育ったナポリの当時の状況を明らかにし、そののち当該著作の一七世紀イタリアにおける文学のなかでの位置を確認し、『著名武将伝賛』の概要に目を向けたうえで典拠の同定を試みる。とりわけ著者クラッツにより描かれた豊臣秀吉と徳川家康の人物像を考察することに努める。クラッツの著作の精緻な読みを通して、一七世紀末のイタリア知識人における、文化土壌が異なる人物に対するイメージの形成、咀嚼の過程の一端を解明することを、最大の目標に据えることとしたい。

## 第一章 クラッツの人物像とその背景

### 第一節 ナポリ随一の文筆家——ロレンツォ・クラッツ

『著名武将伝賛』を著したロレンツォ・クラッツは、ナポリ近郊のピアヌーラ出身で、ピアヌーラ男爵 (Barone di Panura)<sup>(2)</sup> や法学博士という肩書を持ち、弁護士として活躍した一方で、文筆家としても名を馳せた人物である。

クラッツが生きた一七世紀中葉のナポリ王国は、一五〇五年からスペイン王国の支配下にあり、スペインから派遣されるスペイン貴

族の副王がナポリの統治を担っていた。王権は中央から地方の末端に至る統治機構を備えてはいたものの、ナポリ市政もウニヴェルシタと呼ばれる行政単位も貴族層が牛耳っており、王権と貴族層の二元的統治構造を有していた。<sup>(3)</sup> 諸制度・諸手続きが複雑で、様々なレベルでの係争も絶えず、裁判官、法律家、弁護士、公証人などの法曹が重要な役割を演じ、ナポリ王国内で独自の勢力を築いていた。<sup>(4)</sup> このような安定しているとはいえない難い行政基盤であったことに加え、ナポリ王国には、戦争を繰り返すスペイン本国により、戦費調達のため重い税金が課せられるようになった。これに対して民衆たちは、一六四七年に魚屋のマザニエツロの指導のもと反旗を翻し、この機に乗じて制度改革を目論む法曹も加わり、九か月にわたり抵抗を続けた。<sup>(5)</sup> クラッツ自身は反乱に加わることはなかったが、こういう政治的風土のもと文筆活動に動しんでいたことになる。

ここで、当時のイタリア、そしてナポリの文学を取り巻く背景を押さえつつ、クラッツの文筆活動の様子に目を向けていきたい。一六世紀末から一七世紀に至るイタリアでは、大航海時代の進展とともに、アメリカ大陸やアジアといった、非ヨーロッパ世界の情報が多くもたらされ、それらを基にした書簡集や旅行記が多数出版された。イタリアの代表的な哲学者・歴史学者のベネデット・クロウチエ (Benedetto Croce, 一八六六一—一九五二) は、そうした時代潮流のなかで、クラッツの『著名武将伝賛』のような評伝形式の著作が多

く現れ、同時代史を一層詳述するようになったと指摘している。<sup>6)</sup>

ナポリでは一六一一年に、「オズイオージ・アカデミー」(Accademia degli Oziosi) が設立された。政治・神学的問題にはあえて触れず、閑暇 (ozio) のなかで、科学・哲学・文学と緩やかに戯れることを旨として設立され、一八世紀年初頭まで続いた団体だった。このオズイオージとも深い関係にあったナポリ出身の文筆家、ジャンバッティータ・マリノー (Gambartista Marino, 一五六九—一六二五) が作り出す詩は、巧みな隠喩と「驚異」、「滑稽」、「残酷」といったバロック的表象により、当時非常に高く評価されていた。その文体はマリニスト (マリノー風) とも称され、彼の作風を信奉する人びとはマリニストと呼ばれている。クラッツもまた、オズイオージの一員であり、マリニストでもあった。クラッツが、文学活動が活発なナポリという土地柄の影響を多分に受けて文筆活動に勤しんでいたことを窺い知ることが出来るよう。

クラッツは痛風に悩まされながらも、私設図書室を作り、そこを執筆活動の場とし、多くの著作を刊行した。当該図書室でクラッツは、イタリア人のフランチェスコ・パトリツィ (Francesco Patrizi, 一五二九—一五九七) やジャンバッティスタ・ジラルディ・チンツィオ (Gianbattista Giraldi Cinzio, 一五〇四—一五七三)、オランダ人のヘーラルツ・ヨハネス・ヴォス (Gerhard Johannes Voss, 一五七七一—一六四九) といった哲学者らの資料や著作を熱心に収集・整理し、それまで不

完全な状態にあったこれらの資料群をひとつにまとめ上げようとしている。<sup>7)</sup> ギリシア語の知識が乏しかったにもかかわらず、ギリシア語で詩を書くなど、クラッツは好奇心旺盛だった。そうした姿勢が批判されることもあったが、<sup>8)</sup> クラッツは、他の知識人とも盛んに交流し、その証左の一端としてクラッツが認めた書簡二通を『修道院長ミケーレ・ジュステイニアアーニ書簡集』に見出すことが出来る。<sup>9)</sup>

一通の書簡は、前述の「マザニエツロの乱」と思われる反乱の様子を、様々な比喩を織り込みながら婉曲的に伝え、もう一書は一六五六年のペストの流行について先人のエピソードを織り交ぜながら、絶望的な状況を文学的修辞を用いて伝えようとしている。<sup>10)</sup> どちらの書簡も、友人に現在の自身の置かれた状況を報告するという形式を取り、『著名武将伝賛』執筆の意図と同じように、洋の東西を問わず、知り得る限りの世の中の状況を広く伝えようとするクラッツの姿勢をここにも認められる。

同時代一六七八年に出版された『ナポリ叢書』は、「クラッツはナポリ市、ナポリ王国随一の文筆家であり、才気に満ち溢れ、その学識と博識において永遠の名声を得ている」とクラッツを称賛する。ナポリの著名なアカデミーの会員であったことを証左にしており、さまざまな資料から推察するに、彼が文才に恵まれていたことは間違いないだろう。

第二節 『文人伝賛』から『著名武將伝賛』へ——その成立と展開

クラッソの主な著作としては、オヴィディウスの詩集『名婦の書簡』(*Heroiden*)を模した、詩集『英雄書簡』(*Epistole Heroiche Poetiche*, Venezia, 1655)、『ギリシア詩の歴史』(*Istoria dei poeti greci*, Napoli, 1678)、『詩論』(*Poesia*, Venezia, 1685)、『そして二巻から成る『文人伝賛』(*Elogii d'Inomini letterati*, Venezia, 1666)などが挙げられる。

『著名武將伝賛』を論ずる前に言及すべきは、『文人伝賛』の著述の形式であろう。当該著作は、ガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei, 一五六四—一六四二) や、フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 一六一一—一六二六)、トマソ・カンパネッラ (Tommaso Campanella, 一五六八—一六三九)、トルクアート・タッソ (Torquato Tasso, 一五四四—一五九五)をはじめとする、一六世紀から一七世紀中葉にいたる西欧の文学者、哲学者、科学者、聖職者等を、第一巻で七三名、第二巻で七一名が紹介する。

一項目に一人の人物伝という構成をとる本著作は、各項目冒頭に紹介人物の肖像画(銅版画)が付され、それぞれの人物の経歴や事績が二〜五ページ程度綴られたのち、クラッソはじめ、数人の著述家による紹介人物への散文形式の賛辞 (Elogio) で締め括られている。『文人伝賛』において、もう一つ注目すべきは、各文人の評伝に文芸共和国 (*Repubblica letteraria*) という語句が多用されている点である。クラッソが活躍した一七世紀後半、学者集団をはじめとする知識層

は、自らが帰属を意識している知的共同体を「文芸共和国」と呼んでいた。キリスト教の伝統を主たる基盤としたこの共同体は、内部で政治的・宗教的な軋轢こそあったものの、ヨーロッパの知識層を取り巻く一大知識ネットワークの役割を果たしていた<sup>12)</sup>。この「文芸共和国」という概念の内実と重要性を明確にしたのは、一六八四年に *Nouvelles de la République des Lettres* を出版したピエール・ベイユ (Pierre Bayle, 一六四七—一七〇六) と言われている<sup>13)</sup>。クラッソは、一六五六年に詩人ジュゼッペ・バッティスタ (Giuseppe Battista, 一六一〇—一六七五) に宛てた手紙の末尾を「文芸共和国の利益のために」と締めくくっており、クラッソ自身が文芸共和国の一員であることを強く意識しつつ、知識の広大な沃野ともいえる文芸共和国の文脈に身を置いて『文人伝賛』を著したことが窺える。

武將をこのような形式で纏めた著書はクラッソの著作以外にもいくつか認められる。とりわけロシオ・ジュリオ (Roscio Giulio, 一五五〇—一五九二) とポンピリオ・トッテイ (Pomplio Torii, 一五九一—一六三九) により編纂され、一六三五年にローマで出版された『著名武將—その肖像と賛辞—』<sup>14)</sup>の著述の形式は、クラッソが一六六六年に著した『文人伝賛』と構成・形式がほぼ同一であることは注目してよいだろう。『文人伝賛』に見られる各評伝の末尾に散文形式の賛辞を据えるというクラッソなりのオリジナリティは、彼がトッテイの著作を大いに参考にした結果の着想である可能性が極めて高いだ

ろう。

『著名武将―その肖像と賛辞―』の影響を受け、『文人伝賛』執筆にあたり散文を組み込むことで、一つの評伝の形式を作り上げたクラッソは、『著名武将伝賛』においても、上述の二著作の評伝にとられている形式のほぼすべてを踏襲した。クラッソは『文人伝賛』執筆の際に培った経験を、『著名武将伝賛』に活かしたのだった。

一方、ジュリオとトットイの著作を参考にして『文人伝賛』を執筆し、その後『著名武将伝賛』を書き上げたという経緯に鑑みると、『文人伝賛』の執筆に先立つて世界の武将の評伝を執筆するという着想を得ながらも、文人・武将の別なく多種多様な人物に興味を抱き、それらを『著名武将伝賛』と『文人伝賛』としてまとめ上げることで、壮大な伝賛計画を実現しようとしていたと捉えることもできるのではないか。

### 第三節 『著名武将伝賛』 ―「伝賛・肖像画形式」のルーツ

『著名武将伝賛』では、当時活躍した武将九八名の評伝が列挙される。馴染み深いところでは、一人目には豊臣秀吉（一―五頁）が、一人目（四七―五一頁）には徳川家康が載っている。ほかにもムガル帝国のアクバル帝や、フランス国王ルイ一―三世、三十年戦争で名を馳せたスウェーデン国王グスタフ・アドルフなどの名も見られる。紹介されている武将を地域別に分類するならば、ヨーロッパ八四名、

トルコ・ペルシア一〇名、日本二名、インド一名、中国一名となる。

この分布を瞥見してみると、『著名武将伝賛』においてクラッソは、ヨーロッパに限定せず世界的な視野で武将たちの活躍を俯瞰していたことを窺い知ることができる。ヨーロッパの武将のみを対象としていたジュリオとトットイの著作とは一線を画す。

当時ナポリを支配していたスペイン国王カルロス二世（Carlos II、一六六一―一七〇〇）に宛てられた献辞、および「読者への辞」にも、クラッソの著作の執筆意図を知ることができる。ここでは、『イリアス』の主人公アキレウスや、神聖ローマ帝国皇帝カール五世など、先人の業績を引用しつつ、天賦の才に恵まれ、類まれな活躍をしたにもかかわらず、これまで光が当てられることのなかった武将たちを紹介したいと、述べられている<sup>16)</sup>。

ルネサンス期の人文主義者たちは、「歴史」を大いなる分野と認識しており、それと一線を画すようにして、伝記においては礼賛形式で著そうとした。『文人伝賛』や『著名武将伝賛』と同様に、銅版画と評伝を組み合わせ、多くの人物を紹介する著作は、クラッソ以前にも前述の『著名武将伝賛―その肖像と賛辞―』をはじめ、イタリアでは幾つか刊行されている。その源流を探っていくと、パオロ・ジョーヴィオ（Paolo Giovio、一四八三―一五五二）の一連の著作活動へと辿り着く<sup>17)</sup>。ジョーヴィオは聖職者であり、また医師、歴史家、伝記作家、蒐集家として、イタリアを中心に活躍した。『画家・彫刻

家・建築家列伝』の著者ジョルジョ・ヴァザーリ (Giorgio Vasari, 一五一一―一五七四) とも親交を結んでいたことで知られている。

ジョーヴィオの偉業として最も有名なのが、生地コモに建てられたムゼーオ (博物館) と呼ばれる別荘内に展示された四〇〇点にのぼる肖像画コレクションである。ジョーヴィオは、これらの肖像画それぞれへの伝記として、『賛辞 (Elogia)』をまとめあげ、一五四八年に *Elogia virorum bellica laude illustrium et Elogia virorum literis illustrium* の二冊に分けてフィレンツェで出版した。しかしながら、この一五四八年版にはまだ肖像画の木版画はなく、肖像画に伝記が添えられたバーゼル版の刊行は、著書の没後一五七七年になってからのことであつた。その後、ジョーヴィオが確立した肖像画と伝賛を組み合わせた形式は、ヨーロッパ中に広まっていた。

クラッソは、同時代に流布していた同形式の著作のほか、ジョーヴィオの著作をも参考としつつ、『文人伝賛』や『著名武將伝賛』を書き上げた可能性が高い。クラッソとも親交のあつた神学者パッセリーニ・ピエトロ・フランチェスコ (Passerini Pietro Francesco, 一六一二―一六九四) がアプロシオ・アンジェリコ (Aprosio Angelico, 一六〇七―一六八二) に宛てたピエチェンツァからの書簡 (一六六二年二月八日付) に、以下の一節があるからである——「パッセリーニはロレンツォ・クラッソに、トラリアノ・ボツカリーニ<sup>(18)</sup>の絵画を渡そうと奔走している。そしてクラッソもパッセリーニに依頼していること

がある。パオロ・ジョーヴィオに倣つて賛辞を置くために、ラテン語かイタリア語で何か文章を作成してくれないか、と言うのである。<sup>(19)</sup>」この書簡からは、一六六六年に出版される『文人伝賛』を執筆中のクラッソの様子が伝わってくるのに加え、クラッソがジョーヴィオを意識していたことが読み取れよう。

その一方で、『著名武將伝賛』の肖像画の作者が誰なのか、それは明確にはわかっていない。<sup>(20)</sup>

## 第二章 『著名武將伝賛』で語られる豊臣秀吉

第一節 クラッソの豊臣秀吉記述の典拠をもとめて

『著名武將伝賛』の巻頭を飾るのは「太閤様…日本の皇帝」(Taicosma Imperatore del Giappone) こと、豊臣秀吉である。イエズス会の日本報告や書簡集、商人らの報告集等に基づき編集された地理書などの書籍は、イタリアをはじめとしたヨーロッパ各地で流布し、広く読まれていた。私設図書室を有していたクラッソが、たとえ非ヨーロッパ圏へ出たことの無かつたにしても、ヨーロッパ外の武將について調べ上げることが比較的容易であつただろう。

『著名武將伝賛』のように百人近くもの人物を取り上げて著作に仕上げるには、効率よく数々の資料を読み、まとめ上げていく必要がある。既に述べたように、広くヨーロッパで読まれていたイエズ

ス会士書簡集や報告集は、非ヨーロッパ圏の情報を得るためには、最も簡便なメディアであった。クラッソによる秀吉や家康の記述も、これらを参考にしたのであろう。色々な書簡集から秀吉や家康の記述を抜き取つてまとめ上げていく作業は大変な手間を要することに鑑みると、効率を重視して一つの資料を基本に据え参考にして書き進めていった可能性が高い。

一六世紀から一八世紀前葉にかけてヨーロッパでは、イエズス会士らの手により編年体で纏めあげられた様々な「イエズス会史」が出版されていた。日本をはじめとした様々な地域から送られてきた書簡や報告書を、ヨーロッパで活動するイエズス会士らが再編集したものであり、そのなかで秀吉と家康の時代の記述を確認すると、二人に関わるまとまった記述を探り当てられるのではなからうか。

この前提を踏まえるならば、秀吉と家康を記述する際にクラッソが参照した資料として真つ先に想起されるのが、ポルトガル人イエズス会士フェルナン・ゲレイロ (Fernão Guerreiro, 一五五〇?—一六一七) 編の『イエズス会一六〇〇—一六〇一年アジア・日本報告集』<sup>21</sup>と、イタリア人イエズス会士ダニエロ・バルトリ (Daniello Barotii, 一六〇八—一六八五) 編の『イエズス会アジア布教史 第二部 日本編』の二書の可能性がきわめて高い。<sup>22</sup>

家康の記述についての検討は次章に譲り、本節では、秀吉の記述について論じていきたい。ゲレイロの『イエズス会一六〇〇—一六

〇一年アジア・日本報告集』では、第一章がアジア編、第二章が日本編と銘打っている。秀吉の記述には、第二章の第一節(一七〇頁)から第七節(二一六頁)と、五十頁近くの紙面が割かれ、この章は「豊臣秀吉伝」のような体裁をなしている。ゲレイロとクラッソの秀吉の記述を比較すると、生い立ちから出世し、天下を取り、朝鮮出兵、病床に伏せる秀吉を見舞うイエズス会士ジョアン・ロドリゲスのエピソードと、記述の大枠はほぼ一致している。

他方、バルトリの『イエズス会アジア布教史 第二部 日本編』は、統治者毎に章が割り振られているのが特徴的で、第一章「信長の帝権 (Imperio di Taicosama)」二四三—四八三頁、第三章「内府様の帝権 (Imperio di Daifusama)」四八四—八三九頁、次いで徳川秀忠 (Xongunsama)、徳川家光 (Toxongun) をそれぞれ扱う章が続き、全五章で構成されている。

バルトリとクラッソの記述を比較すると、ゲレイロとの比較と同様に大枠での内容が一致しているのに加え、細かな記述においても一致する点が多い。一方で、第二章「太閤様の帝権」には二四〇頁も割かれゲレイロの「秀吉伝」よりもかなり詳細な記述である。

ゲレイロとバルトリの著作は、同じような性質の報告書である。秀吉を記述する際の構成に類似している点が多く、出版年から勘案して、バルトリがゲレイロを参考にしたと考えられる。つまり、ゲ

レイロが著した秀吉をバルトリが参照し、次いでバルトリを参照してクラッソが『著名武将伝賛』において秀吉の記述を書き上げるとい<sup>23</sup>う、伝言ゲームのような過程を窺い知れるだろう。

ここで指摘しておきたいクラッソの秀吉記述の特徴は、ゲレイロ、バルトリをおそらく参考としつつも、両書に付随するイエズス会士たちの様子、カトリックに関する記述が、クラッソの記述では、必要最小限度に削ぎ落され、その上でゲレイロ、バルトリには認められないクラッソ独自の人物評が至る所に散りばめられている、という他に他ならない。おそらく、ゲレイロ、バルトリの記述によってストーリーの大枠を定め、細部については他のイエズス会書簡集に素材を求め、それを大枠の中に散りばめていくことで、全体を構成したものと推測される。

次節では、秀吉の記述の内容を基に、これらをつぶさに確認し、さらに詳しく典拠を検討した上で、クラッソの豊臣秀吉像を明らかにしていく。

## 第二節 クラッソは豊臣秀吉をどう記述したか

### ——貧困からの脱出、権力者への道のり

当時のヨーロッパでは、ルイス・フロイスの『イエズス会年報』を通して、豊臣秀吉の事績、とりわけ秀吉晩年のキリシタン迫害はよく知られていた。この迫害という史実がキリスト教徒クラッソに

強い衝撃を与えただけでなく、秀吉に見られる貧民からのしあがり、王位篡奪に至る立身出世伝のようなエピソードが、ヨーロッパでは殆ど認められないために、読者の目を引く人物伝として、クラッソは秀吉を同書の巻頭に据えた可能性がある。秀吉を紹介する文章は以下のように始まる。

これが、日本の大皇帝、太閤様である。我々が認識するところでは、君主統治のトップとでも言うべき存在で、悪徳よりも美徳に満ちた人物である。「日本において」美徳以上に悪徳が蔓延る君主統治を終えた現在ではあるが、太閤様が支配権を掌握していなかったにしても、確実に帝権の座に相応しい人物として、彼を挙げる事ができよう。当初、羽柴筑前殿<sup>24</sup>と呼ばれていた太閤様は、美濃国<sup>25</sup>の出身、出自は卑しく、乞食<sup>26</sup>よりも貧乏で、裸体を辛うじて藁で覆っているような有様であった。それ故に、日頃から両肩に薪を背負い、街でそれを売って、食糧を買い求めている。彼は貧乏と田舎仕事に、ほとほと嫌気がさすと、斧を捨て、剣を手に取り、大志を抱きつつ、己が低い出自を乗り越えようと、美濃の王の戦場<sup>いくさば</sup>へと出陣していった。死を恐れることなく、危険を冒して戦場で一番槍を務めるなど<sup>27</sup>、名譽と栄光への活路を、戦のなかで大きく切り開いていったのだ。かくして「美濃の」王に受け入れられることとなった



のだが、武勇に勝り、指揮官の地位を得て、幸運にも恵まれた彼は、日本の皇帝、信長<sup>(28)</sup>の將軍にまで上り詰めたのであった<sup>(29)</sup>。

クラッソは秀吉について、まず偉大な皇帝であり、悪というよりも徳に満ちた人物で絶対権力者としての地位を確立した人物として評価している。ゲレイロ、バルトリ双方に認められない記述である。他のイエズス会士書簡をも参照し、自身の評価として冒頭で掲げたのであろう。次いで、秀吉が襤褸<sup>(30)</sup>を纏い、食料を得るために森で刈って担いできた薪を町で売るほど貧しかった生い立ちに触れ、貧乏に嫌気がさすと、刀を取って戦場へと赴き、信長に取り立てられて以降は出世を重ねたとしている。この箇所においては、多少の表現の差異があるものの、バルトリの秀吉記述の冒頭二四三頁に同様の記述<sup>(30)</sup>が認められる。なお、秀吉が貧しい身分からのし上がっている記述は、フロイスが執筆した一五九二年のイエズス会年報にも同様の記述<sup>(31)</sup>が認められる。

信長と山口の王、毛利殿とのあいだの厳しい戦いでは、のりくりとした慎重さを見せる一方、大工事は迅速に済ませる、抜け目なさで、戦を重ねる度に多くの勝利を手中に収めると、毛利殿が領有していた一三か国のうち五か国を毛利殿から掌握した。不幸にも信長が没すると、太閤様はいくつかの目的をひ

た隠しにしつつ山口の王との戦を継続したのも、これら一連の崩壊に乗じ、より容易に偉大な支配機構を構築しようとするためであった。そして事実、その通りになったのである。これには理由がある。つまり、太閤様は毛利殿に無理矢理和議を結ばせ、毛利殿を貢納の下に服従させたのである。こうしたことが、太閤様の底知れぬ偉大さというものの源泉であった<sup>(32)</sup>。

この部分においてもクラッソは、バルトリの二四三頁からの引用<sup>(33)</sup>に一部拠ってはいるが、秀吉が毛利殿に勝利を収める過程は、バルトリやゲレイロの記述には認められない。本能寺の変の詳細が記されているフロイスの一五八二年イエズス会年報などを参照したものと考えられる。またやや細かいことだが、バルトリは、毛利氏のことを「山口の王、安芸の毛利殿 (Achino Moridono Re d'Amangucci)」と形容するのに対し、クラッソは「山口の王、毛利殿 (Moridono Re d'Amangucci)」と国名である安芸を削って言及する。他のイエズス会書簡では「毛利殿」だけの表記が多く見受けられることから、クラッソもそれに倣ったのだろう。またバルトリが「毛利氏との戦い (bataglia)」と表現している箇所を、クラッソは「毛利氏との厳しい戦争 (aspra guerra)」と言い換えている。イタリア語において *bataglia* は局所的な戦闘を指すことが多いのに対し、*guerra* はより規模の大きい戦争を意味する。織田信長と毛利氏との争いは、長期に及んで

いたために、他のイエズス会資料も読ませたうえで総合的に判断し、単なる「戦闘」(battaglia)ではなく、より適切な「厳しい戦争」(aspra guerra)という語句に置き換えたのであろう。

信長が討たれて以降の秀吉の行動については、バルトリが詳細に記しており、それを簡約して、クラツンが引用している形跡が認められる。この部分での秀吉の行動に対する以下に引く評価は、バルトリによる所謂「中国大返し」それに続く「中国国分」の記述を、クラツンが自らの解釈でまとめたものと考えられる。

しかしながら太閤様は、友情が帝権の支えとなってきたことも理解していたから、太閤様の勢力拡大に友人たちが仕える限りにおいては、彼らを愛し、はたまた愛するふりをした。だが、後に彼らが力を付けようものなら、憎しみで以て、数々の恩恵に贖おうとするため、彼らを酷く嫌うこととなった。周辺に恐怖を与えつつ、遠方にまでその名声を轟かせるようになった太閤様は、皇帝であった信長の復讐を果たしたという名声を喧伝しつつ、精強な兵士を伴って、帝権の首都であるミヤコへと進軍したのである。<sup>(38)</sup>

クラツンはここで、バルトリやグレイロの著作では認められない記述を投入している。本音と建て前を使い分け、時に欺瞞に満ちた

振る舞いを見せる秀吉像に、突如力に訴える秀吉像を組み込んでいるのである。当該記述は、クラツンが様々な秀吉の関わる記述を一通り読み込み、咀嚼した結果作り上げたと考えるのが妥当である。クラツンが描き出すこのような秀吉像は、一七世紀にイタリアを中心に受け入れられていた、統治術の議論に見られる欺瞞や偽りという政治的態度そのものである。バロック期イタリアの政治思想の一部が、クラツンの筆により秀吉に投影されていると言つてよい。この点は後段で詳しく論じてみたい。

太閤様は王家の血筋に対して、愛情の機微、そして最大限の忠誠を示すために、信長の長男の幼子<sup>(39)</sup>の後見人となることを望み、狂人である信長の次男<sup>(41)</sup>が警護する安土山城砦へと、その幼子を送り届けるのであった。そこでは、信長の長男の幼子と同年の幼子たちが、次男のもとで養育されていたのである。そして太閤様は、三七殿<sup>(43)</sup>と呼ばれる信長の三男に美濃の国を与えた。於次<sup>(44)</sup>と名付けられた四男に至つては、太閤様は養子として迎え入れることにより、彼に遺産相続の望みを託している。

太閤様は、帝権の実力者たちが太閤様の権力に恐れ戦いていることを了解しているものだから、見せかけだけ善良な公人然とした態度を取って彼らを欺き、信長を偲ぶ絢爛豪華な葬儀を取り仕切った。そうして諸々の動きに終止符が打たれたのであ

る。<sup>(45)</sup>

ここでは、信長の跡目問題を処理した後には信長の葬儀が執り行われた経緯が簡単に記されている。大筋の流れはバルトリの二四四頁から引用<sup>(46)</sup>されているものの、バルトリからの逸脱も認められる。例えば、バルトリの記述では、「皆は忠誠と愛に基づいた新たな職務に専念するようになった。忘れようにも忘れられない信長への思い、信長が獲得した国々を彼の血統のもとで統治しようとする願望を示そうとしたのである。」と、信長家臣一同の結束を強調しつつ、跡目問題処理の目的として、「信長への慈愛や、信長との思い出や感謝の念は、すべて表向きのものであつたとはいえ、秀吉にとつてこれらは、戦争の大義、民心掌握ためには不可欠だつたのである。」ということに言及している。その一方でクラツソは、バルトリの記述の主語を入れ替えるなど、文言を大幅に言い換え、「太閤様は王家の血筋に対して、愛情の機微、そして最大限の忠誠を示すために」といった具合に、全く別のニュアンスに作り替えている。バルトリの記述では他者の介入により、評伝の主人公である秀吉の主体性が希釈されてしまうと考え、あえて当該箇所を削除し、評伝の主体である秀吉の存在感を強調しようとしたレトリックであつたと考えられる。さらにバルトリの記述では、秀吉が於七を養子に迎える理由が挙げられ、秀吉の政治的な抜け目なさが詳しく論じられているが、ク

ラツソはこれらを自らの議論には組み込んでいない。これは、信長の跡目問題を深く掘り下げることに、後段の信長の葬儀のエピソードが希釈されてしまうことを懸念して、当該箇所においては敢えて軽く触れる程度に留めたと考えられる。

信長の葬儀に関する記述はバルトリの二四四〜二四五頁<sup>(47)</sup>からの引用であるが、バルトリは約一頁に渡り、大徳寺での葬儀の様子を伝えていているものの、クラツソは、「絢爛豪華な葬儀」と、簡単に触れているに過ぎない。葬儀の話題に組み込まれている秀吉の「本音と建て前」を使い分ける態度もまた、前段で触れたバロック的政治態度の一つであり、クラツソの解釈が投入された記述と考えられる。

第三節 クラツソは豊臣秀吉をどう記述したか

——海内奇士、果てしなき野心

前節では、秀吉が立身出世の過程を、クラツソがどのような文脈から眼差していたのか見てきた。本節では、権力を掌握した秀吉の傍若無人な振る舞いを、クラツソがどのように咀嚼し、記述したのか考察を進めていきたい。

太閤様の意に背くような意向を抑え込むために、小国の王たちは押し並べて槍玉に挙げられ、身ぐるみを剥がされたのであつた。

太閤様は、民衆には収穫、兵士には給付、他の者たちには幸福に満ちた享樂に浸る希望をそれぞれにあてがうことで、彼らの支持を得ていたが、彼らに対し突如として奴隸という忍苦を強いることもあった。

そして、ミヤコに新しい城砦を築く一方で、他の城主たちからは城を没収し、歴戦の近臣を集め、太閤様が敵と見なした武将や帝権の有力者たちのもとに向かわせた。残酷にも彼の野望に敵対する者たちから生命を奪うためである。太閤様は毛利殿王から三方国を無理矢理召し取る一方、領土を奪われた他の権力者たちに対しては、日本の慣習に従って、腹を切らせたり、生きたまま火炙りに処した。このようなことの要因としては、方々で戦が繰り広げられ、皆が一敗地に塗れていくなかで、太閤様はその才覚と軍隊を以て絶えず行動していたということが挙げられよう。それにより一年も経たないうちに、三〇カ国も(54)の領主たちが、太閤様を愛するということよりも畏怖するようになったのだ(55)。

ここでクラツソは、毛利勢との対峙を経て、秀吉が権力を掌握していく過程を詳述している。大筋でバルトリの二四四頁からの引用が認められる(56)。前半部は、クラツソの解釈が多分に含まれたクラツソの記述は、表現こそ言い換えるものの、バルトリと内容は一致し

ている部分も多く、事実上の引用と見なすことが出来る箇所は多い。語句を変えず抜き出したままに近い引用さえ散見される。

バルトリにおける信長の葬儀の様子を伝える記述は、クラツソの記述における「一年も経たないうちに、三〇カ国もの領主たちが……」の後で記されており、クラツソの意図的な時系列の入れ替えの形跡が認められる。これは、バルトリの著作中では認められない「太閤様はその才覚と軍隊を以て絶えず行動していた」や、「太閤様を愛するということよりも畏怖するようになったのだ」といった記述の補強材料として、クラツソが意図的に改編し当該箇所を組み込んだものと思われる。ここもまたクラツソによるバロック期イタリア政治思想的観点からの人物評とレトリックの要素を強く見取ることができよう。

一五八五年、生まれの卑しさを物語る「羽柴」という名を酷く嫌っていた太閤様は、宝箱を意味する「関白」と名乗るようになった。というのも、日本には正統性のある称号など一つも無いから、内裏から称号が授けられなくても、称号のために婚姻を通して親戚を得ればよいのである。一五九二年には、太閤様は甥に関白の座を譲り、その一方自らは、「至上の主君」を意味する「太閤様」を名乗るようになった。しかし、彼はこれに飽き足らず、ディオ「神」に由来する称号を追い求めるように

なるのだった。<sup>(53)</sup>

先に触れたように、バルトリによる信長の葬儀の記述は比較的長く、一ページほど割かれているため、クラッソンのバルトリからの引用は、葬儀の記述後の二四五頁末から再開となる。関白という名称が宝箱を意味するという記述は、バルトリが一五九一、九二年度日本年報（フロイス執筆）の当該記述「関白はラテン語で宝箱を意味する」<sup>(54)</sup>をそのまま引用し、次いでそれに目を留めたクラッソンがバルトリから抜粋したのである。クラッソンの他の記述もほぼバルトリから字句を変えた上での引用である。その中で目を引く違いは、バルトリが内裏とは古くは日本の皇帝であったが現在では形骸化しているなど詳しい説明を付す一方、クラッソンは、これを全て省いていることである。余計な説明は極力省略し、権力のトップに上り詰めた秀吉、その人に焦点を当てた秀吉伝賛としての物語性を際立たせたのが故の、クラッソンなりの配慮の一つと思われる。

「哀れみ」を誇示するため、紫の修道院の坊主たち、すなわち貴人らが信仰する偽りの宗教の解脱者たちに、多額のお金を寄進したのだが、その一方で、「日本人のあいだで信仰されている」唯一のデリオ「神」を信じようともせず、多くの坊主たちを辱めたかと思えば、偶像を粉々に砕き、寺院を焼き払い、妄信に

耽りやすい坊主たちを殺戮する有様であった。<sup>(55)</sup>

「紫の修道院」、すなわち大徳寺への多額の寄進については、ゲレイロからもバルトリからもクラッソンが引用した形跡は認められない。しかし、先に触れたバルトリにおける信長の葬儀に関する記述では、葬儀を催行するために、「紫の修道院」に一万ドゥカートを支払ったと言及されている。当該箇所には、イエズス会士書簡では使い古された表現とも言える「偽りの宗教」という言葉を被せつつ、後段の神社仏閣の破壊行為の記述と組み合わせることで、秀吉のアンビバレントな一面を端的に表象しようとしたのだろう。なお、神社仏閣の破壊行為に関する記述は、フロイスの一五八五年一〇月一日付書簡において、紀州征伐の途上で根来寺破壊の経緯が詳細に述べられており、クラッソンもこうした記述を参照したものと考えられる。

教会に対しては寛容で、修道士らと抱擁を交わし、我らが信仰の利益を口にするものの、貪欲や不純たる放蕩の利点について語ることもあり、強引に妾を召し抱えたりしていた。太閤様はこう言うのである。「キリスト教は厳しすぎるから遵守するのは不可能である。私が本物の知というものを得たから「キリスト教に対し」寛容なのではない。キリスト教徒の商人らの利便性、つまり戦時に彼らの助力が得られるから、寛容に接して

いるのである」と。<sup>(56)</sup>

この箇所以降、クラッソによるバルトリからの引用の形態は変化を遂げる。これまでは、ある程度まとまった箇所をそのまま引用し、クラッソが自らの言葉に替えて叙述を進めていた。しかしバルトリが二四六頁前半で秀吉の死について述べ、秀吉の記述に一旦終止符が打たれた以降は、クリンタンの話題に中心が移り、秀吉に関連する記述は、その補完的な役割を担うようになり、主流から外れ各所に散りばめられるように配置されていく。そこでクラッソは、バルトリの秀吉の記述を各所から抽出して再構成し、自身による秀吉伝賛の展開を試みるのである。当該箇所においてはバルトリの二四六頁前段に記された「キリストの信仰を支持していたが、後に迫害した。(中略)羽柴は常に同じような決まり事を命じていたのである。羽柴に良い利益をもたらすもの、全てはここに通じている」ということが唯一の基本原則なのだ。」<sup>(57)</sup>と、二四七頁の中段「羽柴はキリストの信仰を抱擁するばかりか、キリスト教の道徳に尊敬の念すら抱いていた。(中略)羽柴が述べるところでは、宮廷内において妾三〇〇人、身の安全と享樂に奉仕させるべく、若者一二〇人を側に置いてあるとのことだが、それは特段驚くべきことではない」<sup>(58)</sup>から引用し、この二つを組み合わせるような叙述となっている。

なお、クラッソがキリスト教徒商人の利益へ言及する記載は、バ

ルトリ、クラッソ、ゲレイロ、他のイエズス会書簡には該当する記述を現在までの調査では見つけることができていないが、秀吉の行動を目の当たりにしてきたイエズス会士共通の認識であっただろう。クラッソもこれを共有し、前段の議論と組み合わせることで、秀吉のキリスト教に対する姿勢をより多面的に表現しようとしたものと思われる。

太閤様は、帝権の境界が手薄であることに気づいた。人間の野心とは、得たい物を得たところで満たされるものではない。彼は三〇万の兵士を仕立てた。そうすることで、高麗を征服し、シナに勝利を収め、フィリッピン諸島に恭順と貢納を突きつけようとしたのである。太閤様が甥に帝権を譲ったのは上辺だけで、彼はもう一方のものを得るに至った。高麗で損害が生じたため、まず軍隊の一部を差し向け、次いでより強力な軍勢を率いて彼の地へと乗り込むと、「高麗の」王はシナに逃れ、「高麗の」人民は山に逃げた。勝者にして王国の主君、太閤様は彼の地に留まるも、敵の潰走に乗じて勝利を利用することなどは全く無かった。すると怒りの混乱に身を任せた敵方は、山を下りて侵攻を開始した。それにより、勝利者として振舞っていた者たち「豊臣方」の両手は、残酷にも血まみれとなり、敵方は彼ら「豊臣方」を日本に接する海岸線まで撤退させるに至った。

豊後の王は臆病にも、この一連の「負け」戦に参加していたため、太閤様から王国を奪われ、その身柄を山口の王、毛利殿のもとに送られたのであった。<sup>(8)</sup>

この箇所は朝鮮出兵にかかわる記述であるが、クラッソはまず、「太閤様は、帝権の境界が手薄であることに気づいた。人間の野心とは、得たい物を得たところで満たされるものではない」という自らが描いた秀吉像を提示し、それを強調して本題に入る。朝鮮出兵に関する記述はバルトリでは三三三〜三三五頁となっており、「秀吉伝」とは別の項目として詳細な説明が施されている。一方クラッソは、バルトリの記述を冒頭から要点だけをまとめる形で部分的に引用し、朝鮮、中国、フィリピンへの威圧の理由を述べた上で、関白の座を甥の秀次に譲ったことを、理由も付して説明する。しかし、クラッソが述べている朝鮮出兵後の経緯は、事実とは全く異なっているのと言うまでもない。『著名武将伝賛』は、武将としての功績を語らなければならない。史実を改変してまでクラッソは、秀吉自身が直接朝鮮に乗り込み、獅子奮迅の活躍をしたことにして、その類稀な武勇を語ろうとしたのではないか。

朝鮮出兵に関わる記述の後半では、クラッソが当時得ていた情報に基づき、豊後国王つまり豊後の大名の大友義統が改易され、毛利家預かりとなる経緯を議論に組み込み、朝鮮出兵の失敗があたかも

秀吉の部下の失態であるかのように見せかけて、前段で語られた秀吉の「架空の武勲」が毀損しないように努めている。大友義統のエピソードを差し込むことで、一旦史実から離れた空想の朝鮮出兵に関わるエピソードを現実に戻し、全体の話の帳尻を合わせようとしているかのようにさえ思える記述であろう。

一五九五年、太閤様は、裏切り者との評判が立っていた甥の関白殿を死に追いやったのだが、関白殿の死には以下のような原因があつた。つまり、老齢の太閤様に息子が生まれたことにより、関白殿を生かしたままにしておく、帝権移譲の際に、息子の安泰が脅かされると、太閤様が判断したのである。そして関白殿とともに、彼の息子たちや友人ら、召使いたちまでもが殺されたのであつた。<sup>(9)</sup>

同時代のイエズス会書簡集や年報を紐解くと、至る所で秀吉の残忍性が取り上げられており、書簡集の読者の間では、「秀吉＝残酷・暴君」というイメージが作り上げられていたのだろう。相当数のイエズス会士書簡集に目を通したにちがいないクラッソもまた、秀吉の残忍性を象徴するエピソードとして、豊臣秀次・清の経緯を取り上げたと考えられる。バルトリの当該箇所の記述は、三六六頁末から三六七頁となっており、そこから当該箇所が抽出され、クラッソ

の言葉に書き改められている。

太閤様には思いめぐらせていることがあつた。つまり、太閤様の栄光に満ちた功績の数々を、「人々の」記憶のうちに永遠に留めおくというものである。そのために、桁外れに壮大な構造物群を築き上げたのだが、ギリシア・ローマのそれに勝るとも劣らないものであつたと言われている。しかしながら凶兆とともに地震が起きて、それらは倒潰してしまつた。

人びととの戦に飽きてしまつた太閤様は、ディオ「神」との戦も欲するようになったのだが、それはキリスト教信仰潰滅を意図したものであつた。そのため多くの者たちが殉教の榮譽に浴することとなつた。しかし、自然に湧き上がる慈悲というよりも、ポルトガル人への恐怖から、太閤様はその残忍性を引つ込めるに至つた。<sup>(6)</sup>

一五九六年九月六日に発生した慶長伏見地震は、バルトリの記述でも取り上げられ三六七頁から三七〇頁で詳細に述べられている。

そこでは、金に糸目をつけずに築城された伏見城の絢爛豪華なさま、秀吉配下の武将たちが、明朝使節団受け入れのために奔走する様子が描かれる。次いで天候不順や日蝕などの凶兆が認められるなか、八月六日未明「原文ママ」<sup>(6)</sup>に凄まじい地震が発生し、全てが瓦解する

様子が紹介されている。クラッソは、このようなバルトリの慶長地震記述のなかで、伏見城と地震の特徴的な記述のみを抽出し、クラッソ自身の解釈による秀吉の心情描写を織り交ぜることで、秀吉伝賛の構成要素の一つに加えている。

後段のキリスト教と秀吉の関係性を表す記述については、バルトリや他のイエズス会書簡集に、酷似するような記述は管見の限りでは認められないが、クラッソが秀吉の伴天連追放令に関する記述に目を通して咀嚼し、秀吉の心情を中心に据えた解釈へと変えたものと思われる。

第四節 クラッソは豊臣秀吉をどう記述したか

——神に近づきし晩年、新八幡への賛辞

手練手管の限りを尽くし、権力のトップに上り詰めた秀吉。彼の野望、支配欲は留まることを知らず、日本を飛び越し中国大陸にまで及んでいった。そのような秀吉の晩年をクラッソはどのように記述し、どのような賛辞を送つたのか。以下に議論を進めていきたい。

薪拾いに始まり、並外れた放蕩生活に溺れ、果ては残虐なことにまで考えを巡らせていた太閤様ではあつたが、それを支えていた健康も、ついに維持することが難しくなってきた。病により死の床に臥すようになると、魅惑の街、伏見へと移つた。



そして自らの末期を悟り、八カ国の領主にして良家の血を引く家康に<sup>66</sup>、息子秀頼のことを託したのであった。帝権の実力者の多くと和解し、「新たなる武神」<sup>67</sup>を意味する「新八幡」<sup>68</sup>という名の寺院一つを、太閤様のために建立するよう命じると、ひっそりと身罷るために宮殿の離れへと引き籠ったのであった。ロドリゲス神父は<sup>69</sup>、格別の恩寵を携えて太閤様を見舞うべく、「彼の寝所を」訪ねたのだが、太閤様は靈魂不滅の議論には耳を塞いだ。<sup>70</sup>

クラッソによる「秀吉伝賛」も、ここからは晩年の記述へと向かう。冒頭で短く、秀吉の波乱万丈の半生を振り返って纏めたいうえで、バルトリの記述を引用しつつ、家康とのやりとり（バルトリ…四四八頁）、自身を新八幡として奉祀するよう指示した遺言（バルトリ…四五一頁）、ロドリゲスとの会談の様子（バルトリ…四五一頁）を取り上げる。すでに指摘したように、バルトリにおける二四四頁以降の秀吉の記述は各所に散らばっているため、クラッソが拾い集めて再編集することで、リズムよく纏まった記述となっている。

家康に将来を託し、自らはキリスト教の信仰を最後まで拒絶するも、死後なお、異教の武神として君臨できるよう配慮に余念のない秀吉という稀代の君主像——クラッソが描き出そうとした秀吉像を、ここに明瞭に見てとることができよう。

一五九八年九月、太閤様逝去、享年六四歳。太閤様は小柄にして屈強、厳めしくも田舎臭い顔立ちで、少しだけ髭をたくわえており、片手には指が六本あった。そして、太閤様に兼ね備わっていた武勇、阿諛、偽善、欺瞞は、比類なきものがあり、支配権の獲得とその維持において右に出るものはいなかった。このような諸活動から、彼は「日本のティベリウス」と呼ばれるに至った。太閤様は一六年ものあいだ、支配者の座に君臨したのだが、彼とともに帝権もまた尽きてしまった。というのも、強引な家康は太閤様の数々の痕跡を握りつぶし、それまで名乗っていた名を棄て、内府様<sup>72</sup>と名乗るようになったからである。<sup>73</sup>

クラッソの「秀吉伝賛」結部もまた、バルトリの記述の随所からの寄せ集めで構成されている。死亡日（バルトリ…四五二頁中段）、死亡年齢（バルトリ…四四七頁）、秀吉の人物像（バルトリ…二四三頁中段）、ティベリウスの比喩（バルトリ…二四六頁上段）といった具合で引用し、末尾に家康を登場させ、さらにストーリーの続きがあるかのような余韻を残しながら、締め括っている。

秀吉の人物像については、バルトリの冒頭部分における詳細な人物紹介を<sup>74</sup>、クラッソは要点のみを抽出して、簡便にまとめ上げている。そのうえで、議論の末部に敢えて配しているように見える。つまり『著名武将伝賛』における人物像の末尾配置は、クラッソが人

物像を重視していた証左といえよう。「太閤様に兼ね備わっていた  
武勇、阿諛、偽善、欺瞞は、比類なきものがあり、支配権の獲得と  
その維持において右に出るものはいなかった」とするクラッソンの秀  
吉評は、当該著作のイタリア語タイトルに含まれる“Elogio”（賛辞）  
にもつながる、秀吉への最大の賛辞のようにも思われる。またティ  
ペリウスの比喩は、バルトリからの引用とは言え、クラッソンの政治  
観や時代意識が垣間見られる重要な比喩であり、本章の結論で詳し  
く論じたい。

クラッソンの『著名武将伝賛』は、以下に引くラテン語の抒情詩に  
よる賛辞“Elogio”で締めくくられる。

市民法学者にして著者の息、バルトロメオ・クラッソ作

日本の皇帝、太閤様

生まれの低さは最たるも、立てし勲功抜きん出づ。

森の繁みを抜け出して、王宮内へと移り住まむ。

かつては家畜の番なれど、後には民の先導者。

戦場にては勇ましく、諸事の振る舞い、抜け目なし。

主君と思いを隔てつつ、主君より王権篡奪す。

支配しつつ、欺きて、欺きつつも、支配せり。

戦で敵を倒せども、彼の専制、刃向かう敵も、打ち破らむ。

金への渴望底知れず、強者どもの血に、しとど濡れむ。

近き者に、勝利を収め、より遠き者には、恐怖を与ふ。

数多の国々奪い取り、天下統一果たしたり。

真に永遠の名声、資する者。

永遠の名に資する逆徒があろうとも。

人びとの振る舞いにより、遷ろい易き運命が、いかほどまでか、  
学ばれよ。

彼の者は、上り調子なる時も、衰え朽ちる時にさえ、戯れごと  
に興じらむ。

斯くの如きを注視せよ。<sup>⑤</sup>

聖ヤコブ騎士団員 庇護者にして後援者 カルロ・アンドレ

ア・シニバルデイ作

馳名馳せし牧人、ロムルス、キュロスのごとし。

森から王国、双方繋ぐ梯子を、入手せり。

王に通ずる、由緒正しき、血を引けど、

卑しき牧人、太閤様。

しかれども、策を練り出し、武力を以て、王権篡奪果たすらむ。

翻り、令名高き彼の者は、ウイリアートゥスのごとし。<sup>⑥</sup>

天啓により、一雙なりし、真の姿と外面は、

日出ずる処より、はたまた、日没する処からも、照らされり。<sup>⑦</sup>

両者の賛辞は、どちらも貧民からのし上がり、日本の支配者にまで上り詰めた秀吉の半生、それを成し得た秀吉の卓抜した能力に焦点が当てられている。ヨーロッパではあまり認められない、身分を超えた稀有な立身出世のストーリーに、読者の注意を向ける仕掛けとも言えるであろう。とりわけ、シニバルディの詩においては、貧民ではないが幼き頃に山中に棄てられ、雌犬に育てられた伝説のある、アケメネス朝ペルシア帝国の創建者、キュロス二世と、生後間もなく川に捨てられ、漂着した先で、雌狼の乳で養われ、後に羊飼いに拾われて、ローマの建国者とされるロムルスを引き合いに出すことで、読み手に馴染みのある人物から、未知の秀吉のイメージを引き出す試みがなされている。末尾に置かれたこの二つの詩を以て、秀吉が纏うイメージが定着し、『著名武将伝賛』での秀吉伝賛はこうして結ばれるのである。

#### 第五節 秀吉記述から浮かび上がるクラッソの思想とは何か

のちに見る徳川家康の記述にも同様のことが言えるが、クラッソは、バルトリヤ先行するイエズス会関連資料から引用しつつも、評伝執筆という目的のために、キリスト教に関わるエピソードは必要最低限に抑え、時には脚色を施しはするものの、自己が「客観的」と判断する記述のみを丹念に拾い上げて、一つのストーリーを構成している。この点は、文筆家クラッソの特徴として指摘しておきた

い。

クラッソの秀吉に対する評価は、年を追うごとに増す秀吉の残忍性や野心、猜疑心により、下がっているように見えるが、武将、支配者としての秀吉への評価が一貫して高いという点も、クラッソの秀吉伝賛における特徴の一つであることは間違いない。その一方、同時代のヨーロッパに見られた政治的な「偽りと欺瞞」という観点からも、クラッソが秀吉の人間像に迫ろうとしたことが記述から伝わる。「太閤様は、友情が帝権の支えとなってきたことも理解していたから、太閤様の勢力拡大に友人たちが仕える限りにおいては、彼らを愛し、はたまた愛するふりをした」あるいは「秀吉はキリスト教に寛容であるが、それは真の分別から生じたものではなく、キリスト教徒の商人が役に立つからであり、引いては戦の時に彼らがいると助かるからだ」といった記述が好例だろう。一七世紀西欧では「偽りと欺瞞」(Disimulazione e Inganno) という政治的態度は、統治術の一つとして重要視され、議論も盛んで関連書籍も多く出版されていた背景も関わっていると見てよいだろう。

ここで、指摘のあつたテイペリウスの比喻について言及しておく。一七世紀のイタリアの著述家たちのあいだでは、「タキトウス主義」という歴史著述スタイルが流行していた。このタキトウス主義とは、帝政ローマ時代の歴史家コルネリウス・タキトウス(Cornelius Tacitus, 五五―一二〇)の著作『年代記』や『同時代史』に見られるような、

歴史の変遷を振り返るなかで政治的教訓を見出そうとする著述スタイルである。タキトウスは共和政ローマに憧憬を抱き、独裁君主的なローマ皇帝ティベリウス (Tiberius, 前四二―後三七) に批判的であつた一方で、安定した統治を展開していくうえでは独裁政治も止むなしというスタンスで右記の著作を著した。独裁を許容しながらも、タキトウスは、理想とした共和制ローマ時代の最高意思決定機関であつた元老院を軽視するなど独裁傾向の強かつたティベリウスやドミティアヌスといったローマ皇帝に低い評価を与えている。特に反対派を粛清するなど恐怖政治を敷いたティベリウスに対しては、「悪帝」というように評価は手厳しい。

一六―一七世紀のヨーロッパは、タキトウスの生きた時代と同じような状況に陥っており、迅速な意思決定により容易に国力を集める、いわば専制的な絶対王政国家(スペイン、フランス等)が台頭しつつあつた。とりわけイタリヤの著述家たちは、ギリシア・ローマの共和政や民主政を理想としながらも、合理的統治という観点において絶対王政国家の優位性を現実として容認せざるを得ない状況にあり、その理想と現実とのギャップを埋めるタキトウス主義が、彼らにとつて非常に都合な著述形式として捉えられ、広く浸透していたのである。クラッソもその例外ではなく、秀吉を「日本のティベリウス」と断じた背景にはこういう同時代の政治情勢があつた。クラッソの記述に認められる「偽りと欺瞞」、「タキトウス

主義」という着眼点は、当時の西欧の政治思想の潮流から説明できるのであり、クラッソの教養の深さはもとより、クラッソが希求した政治家像、君主像をも垣間見ることができよう。

ところで、クラッソの秀吉伝賛において、未だ疑問が一つ残る。何故、秀吉が『著名武將伝賛』の冒頭を飾つたのかという疑問である。ここで私見を記してみたい。先述のようにクラッソの秀吉に対する評価は極めて高い。秀吉は非ヨーロッパ圏の人間であり、ヨーロッパの人々には想像もつかない貧民から立身出世を遂げた人物でもある。こういう人物を冒頭に置けば読み手の興味を引くこと疑いなし、と思つたであろうことは想像に難くない。たしかにクラッソによる秀吉の記述には、出自の貧しさや非人間性を強調する記述が多々認められるが、それは予想を超えた功績を残した秀吉に対する逆説的な賛辞とも解釈可能だろう。これは、自らの想像の及ばない、非ヨーロッパ世界の「驚異」に対する好奇心にも繋がることにもなる。『著名武將伝賛』に先立つ『文人伝賛』のなかで、クラッソはコロンブスやイタリヤ博物館に新風を吹き込んだアルドロヴァンディを取り上げており、新しい知識や世界に対して並々ならぬ好奇の眼差しを向けていた。クラッソには未知の非ヨーロッパ世界の武將である秀吉が、ティベリウス帝のように、取り巻く現実と呼応した統治を行つていた。クラッソは「驚異」に対し嬉々とした眼差しを向ける文筆家だつた。そういうクラッソが、読者に相当なインパクト

を与えること間違いない非ヨーロッパ圏の人物である秀吉を巻頭に据えない理由はないと合点がいくのである。

### 第三章 『著名武将伝賛』で語られる徳川家康

#### 第一節 クラツソは徳川家康をどう記述したか

——巧言令色を講じる内府様

クラツソの家康伝賛とでも言うべき記述は、『著名武将伝賛』の四七〜五一頁に置かれている。「内府様…日本の皇帝」(Daiusama Imperatore del Giappone)というタイトルのもとで評伝の幕が開く。秀吉の記述と同様に、バルトリ、イエズス会書簡集や年報からの引用で構成され、適宜クラツソの解釈が織り込まれていく形式をとる。「秀吉伝賛」と同様である。前章にならいつつ、典拠の同定作業と内容の分析を進めて行きたい。

この皇帝の昔の名は家康 (Ceiaao) であったが、後になって人々のあいだでは、内府 (Daiiu)、また一般的には内府様 (Daiusama) と呼ばれるようになっていた。生まれは高貴で、八ヶ国の領主であり、生まれながらにして数々の運に恵まれていたとはいえ、出自の高さ、支配領域、立てた武勲の大きさ、思慮深さ、どれを取っても秀でていた。そのために、日本の帝権

を手にした。とはいっても、内府様が、領有していた国々では、常日頃から不正をはたらき、詐術を用いていたからこそであり、目覚ましい活躍こそあったものの、絶えず悪の霧が立ち込めていたのであった。<sup>(8)</sup>

クラツソによる家康の記述は、バルトリの四四八頁にある第二章「太閤様の帝権 (Imperio di Tacosama)」からの引用で始まる。秀吉の場合と同様、引用の間にクラツソ自身の解釈——「生まれながらにして数々の運に恵まれてはいたとはいえ」や「内府様が領有していた国々において常日頃から不正をはたらき、詐術を用いていたからこそであり、そこでは、目覚ましい活躍こそあったものの、絶えず悪の霧が立ち込めていたのであった」——が、禍々しくも正鵠を射た評価として添えられる。バロック期イタリア政治思想の文脈に則ったクラツソの判断による、と言つてよいだろう。こうして、秀吉とは正反対の出自を持つもう一人の日本人武将の紹介が始まるのであった。

先の帝権の篡奪者であった太閤様は、人生最期の時を迎えた折、内府を自らの枕元に呼び寄せ、覚束ない言葉遣いで涙を流しながら、家康にこう告げるのだった。「五歳になつた我が息子の秀頼、そして領国の統治のことを頼む」と。それもこれも、

将来的に内府の孫の一人が、秀頼の妻となる約束を「内府と太閤様」が交わしていたものだから、「秀頼の」もう一方の父である内府が秀頼を養育するということになるわけだ。そして、万全にして最大限の保障として、何人かの総督たちを任命し、彼らに日本の異教神の名の下で忠誠を誓わせ、貴族や市民の秩序維持に当たらせようとしたのであった。

もう片方「太閤様」は内府を望ましい人間と思っているわけではなかったのだが、内府は顔にこそ悲壮感を漂わせていたものの、心の内では陽気そのものであり、「太閤様より課せられた」重責と太閤様の死を受け入れたのである<sup>(80)</sup>。

秀吉が人生の最後を迎えた時の家康との対話では、バルトリの四八〜四四九頁<sup>(81)</sup>において、時に直接話法が用いられつつ、躍動的で情感のこもったシーンが展開されている。右の試訳では一部直接話法としたが、クラツソはすべて間接話法を採る。秀吉と家康のやり取り、及びバルトリでは詳細な記載のある五大老選出の経緯が、「家康伝賛」では構成要素の一部にとどまるものとして、コンパクトにまとめられている。

秀吉と家康とのやり取りに続き、家康の内面性の描写へと移っていく。この箇所もバルトリの四四九頁、四五〇頁<sup>(82)</sup>の記述を参考にし、クラツソの言葉で手際よく書き換えられている。前章でも触れた、

政治的な「偽りと欺瞞」という文脈から、家康という一君主の姿を描き出そうとしていることがわかる。

皆が統治に専念するなかで、秘めたる想いを内に抱いていた内府はというと、皆の利益が関係する場においては肅々と行動する姿が多く見られた。また、権力の座をめぐり、力と権威を通じて内府と対立する可能性がある者も多量いたものの、内府は寄進や政務に旺盛な姿勢を示すことで、彼らの気をそちらに逸らしたのであった<sup>(83)</sup>。

バルトリは、秀吉死後の五大老を中心とした動向を描くのに対し、クラツソは自らの「家康伝賛」に引き寄せるかのように、五大老については簡潔な言及にとどめ家康を中心に置く記述へと書き改めている。「内府は寄進や政務に旺盛な姿勢を示すことで、彼らの気をそちらに逸らしたのであった」の箇所については、類似した記述は管見に入った限りでは、バルトリやゲレイロでは認められない。イエズス会士による何らかの記述を参考にしたのであろう。

第二節 クラツソは徳川家康をどう記述したか

——多謀善断の将、関ヶ原における勝利

前節では、家康が本音と建て前を使い分け、着々と権力の掌握を

進めていく様子を、クラツンがバロック期政治思想の文脈から咀嚼し、家康像を提示していることを論じてきた。本節では、家康が関ヶ原の合戦から権力の頂点に上り詰める過程を見ていきたい。

しかしながら、このような帝権「天下」が太平であろうと、嵐が全く起きないというわけではない。つまり、総督たちが「太閤様崇拜」という金科玉条のもとで恩恵に与っていた一方で、彼らとは異なり、必要以上の動きを見せる内府に対し、対立心を抱く者も非常に多かった。だが強大な権力に立ち向かおうとすれば、すぐさまその権力の敵と見做されてしまうものだから、大半の者は身を守ることに徹した。

結果として、複数の党派に分かれてしまった日本では、それらの党派同士で武器無き戦が始まったのだが、支配権が得られるわけでも、はたまたそれが維持されるわけでもなかった。伏見と大坂とのあいだに、両党派二〇万の兵士が集結した。けれども内府は武器を手にはせず、巧妙な手口を使って戦に臨み、一か八かの危険に晒されるでもなく、敵党派の頭であり、軍団の牽引役でもあった治部少輔<sup>84</sup>を初め端で撃破した。そして、内府は治部少輔からあらゆる権限を奪い、惨めな境遇のなか、僻地で生きていくように迫ったのであった。しかしながら、まだ復讐の可能性が残されている限り、多くの者は屈辱に耐え忍ぶ

もの。だから勇壮な治部少輔は、摂津守アゴステイノーと秀頼の指南役である景勝<sup>86</sup>の軍勢を従えて、より力をつけて再び陣営へと戻ってきたのであった<sup>87</sup>。

第一段落目では、クラツンの自身の解釈に基づく格言めいた「このような帝権「天下」が太平であろうと、嵐が全く起きないというわけではない」といった記述や、「強大な権力に立ち向かおうとすれば、すぐさまその権力の敵と見做されてしまうものだから、大半の者は身を守ることに徹した」以外は、バルトリの四七一頁<sup>88</sup>の一部の要約であり、クラツンの言葉に書き換えられている。

第二段落目は、「石田三成襲撃事件」を取り上げたものと思われるが具体性に乏しく、抽象的な描写が続くため、どの事件を指すかはつきりしないところがある。しかし動員兵数などに疑問符がつくものの、全体の経緯と「家康が三成に」僻地で生きていくように迫ったのであった」という記述から、襲撃事件の結末である三成の佐和山城蟄居と判断することができる。

第二段落目も、前段落と同様にバルトリの四七一頁<sup>89</sup>で取り上げられている。バルトリでは、家康が次第に尊大な態度を取るようになり、他の大老たちや秀吉の旧臣たちとのあいだに溝が出来てしまう様子、家康が武器を用いず話し合いで解決を試み、少数の兵を引き連れて三成のもとを訪れ、政権からの離脱と近江(Yomi)への蟄居

を要求する旨が詳細に描かれているが、クラツソの記述は、それは若干趣が異なることに気づく。「内府は武器を手にはせず、巧妙な手口を使つて戦に臨み、一か八かの危険に晒されるのでもなく、敵党派の頭であり、軍団の牽引役でもあつた治部少輔を初め端で撃破した」という記述をみればわかるように、家康の活躍が非常に誇張されたかたちで描写されている。秀吉の記述でも度々見られたように、「家康伝賛」における主人公家康の武勲を強調するためのレトリックであることは明白である。

また、「しかしながら、まだ復讐の可能性が残されている限り、多くの者は屈辱に耐え忍ぶもの。だから勇壮な治部少輔は、摂津守アゴステイノと秀頼の指南役である景勝の軍勢を従えて、再び陣営へと帰参したのであつた」という記述は、バルトリや他のイエズス会士書簡で類似箇所を確認できない。ここでも物語の主人公である武将家康のライバルとして三成を一層引き立てる必要があつたために、敢えて手を加えたものと思われる。

このような「治部少輔の」軍勢に対し、内府も軍勢を整え、敵方よりも少ない兵力で戦に出陣し、「敵方の」何人かを内府の支持に回るよう唆したりもして、この戦いでも内府が勝者となつた。備前の王である中納言殿は戦死を遂げ、治部少輔と摂津守アゴステイノに至つては、またも囚われの身となつてしまつ

た。虐殺、そして多くのものが抱いていた、内府様のもとへと引き出される恐怖、ともに凄まじいものがあつた。何人かは、そこに赴いたが最後、勝鬨を挙げて囚に乘らせてなるものかと、このような野蛮な国々の風習に従つて、自ら腹を切つた。山口の王、毛利殿は、防御力があつた大坂へ逃れたものの、惨めにも降服した。

これは関ヶ原の合戦を描いたと思われる箇所であり、キリシタンであつた小西行長の様子に大半の紙片が割かれているバルトリの四七二〜四七三頁から引用され、クラツソの言葉に書き改められている。バルトリによる関ヶ原の合戦の記述は非常に詳細であるものの、クラツソは要点を絞つてまとめようとするが余り、バルトリの記述から離れている点が多いことは否定できない。

ここでも、クラツソは自身の武将家康のイメージをより上げるために、家康の華々しい勝利を告げ、それに呼応するかのように対敵者の末路も大仰に描くといつた、家康本位の構成をとる。たとえば、後に流刑に処される宇喜多秀家は、バルトリにおいて「刀剣の一撃で頭部を失つた」と記されている一方、クラツソの記述では、これらが簡略化され、戦死したことのみに触れられている。

このように運氣も上々の内府は、敵方の王国を残らず、急ぎ



滅ぼして、極めて短期間のうちに日本の支配者の座についたのであった。その後、内府はより力のある者から命を奪い、信用を置けぬ者からは尊厳を奪った。そして内府を慕ってきた者には漏れなく褒美と名譽を与えた。このような行動を以て、内府は六十六国の皇帝の座を射止めたのであった。卑しい生まれで、貴族らの弾圧に耽っていた太閤様とは異なり、内府様は高貴な血筋の出であったから、誠実さを以て貴族を存続させた。<sup>(95)</sup>

バルトリの四七三頁<sup>(96)</sup>から引用される戦後処理の様子は、同書第二章「太閤様の帝権」からの最後の引用であり、これ以降は第三章「内府様の帝権」から引かれる。注目すべきは、秀吉との比較を投入している点である。秀吉との出自の違いを明確に伝え、家康が寛容にして正当な支配者であることを読者に印象付けようとする狙いがあるのだろう。

このように運命と内府様の人生が一緒くたに巻き込まれていくなかで、彼はキリスト教<sup>(97)</sup>に試練を与えた。というのも、内府様は利益としてはキリスト教を愛していたが、教えそのものとしては、キリスト教を酷く憎んでおり、坊主らと一緒に偶像崇拜者を装っていたからである。言うなれば、彼の教えの下では、悪辣非道な為政者は誰もが、異教神を信じてなどいないかのよ

うに見えるのである。

内府様は貴族たちにキリストの信仰を禁じたかと思えば、様子や行動からもわかるほどに、一段の頑張りで布教活動に臨んでいた司教や神父たちを褒めたたえた。しかしながら、内府様は凄まじい迫害の暴挙に出るようになり、既に到来していたイギリス人、オランダ人らは、偶像崇拜者以上のカトリックの敵と成り変わったのである。<sup>(98)</sup>

第一段落目は、バルトリの第三章「内府様の帝権」四八七頁からの引用となっており、第二段落目は七三二頁<sup>(100)</sup>からの引用と思われるが、家康による貴族に対するキリスト教の禁止や迫害の記述だけでは、引用された原典の特定には至らない。バルトリの第三章には、非常に多くのキリスト教迫害の記述があり、家康による迫害を家康のエピソードの一例として要点を絞って記載したのであろう。

なお、前章で取り上げたクラッソの記述にキリスト教やそれに係る日本批判がきわめて少ないのは、既述のとおりである。武将の功績を論じることを旨とする伝賛という形式では、キリスト教関連に多くの紙面を割くことが難しいという事情もあつただろう。それでもキリスト教に関わる記述を挿入する必要もあり、必要最低限の記載となつたと考えられる。『著名武将伝賛』の献呈先はスペイン王カルロス二世であり、スペイン王は同時にカトリック王を名乗るこ

とを、ローマ教皇庁より認められていた。献呈先への体裁を考慮してクラッソは、キリスト教関連の記述を必要と認められる限りで投入したという事情があったのではないか。

内府様は、総督たちや領国が隣接する王たちとの軋轢をはじめ、破滅を招くあらゆる事を気にかけており、ことの次第によつては力や策略に訴えることがあった。それも寛大な精神の持ち主であるが故のことなのだが、そうであつても他の者たちが同じようなこと、つまり内府様が帝権を獲得したときと同じような手段で以つて、勢力を拡大していくことには我慢ならなかつた。<sup>(10)</sup>

クラッソが家康に関する多くの資料を読み込み、紙幅の制限が課される評伝に、家康の人となりを表象する文言を、端的にそして巧みに組み込んでいったと思われるのだが、典拠は、バルトリヤゲレイロ、イエズス会書簡などに未だ見出せてはいない。この記述は、晩年に差し掛かった家康が疑心暗鬼となつたところで、「家康伝賛」のクライマックス大坂の陣への橋渡しともなる重要な導入部の機能を果たしている。

### 第三節 クラッソは徳川家康をどう記述したか

——老獪家康、画竜点睛を以て臨んだ大坂の陣  
前節では、家康が手練手管の限りを尽くして、関ヶ原の合戦で勝利を収め、その後の権力基盤の構築の過程を見てきた。本節では、晩年を迎えた家康がどのように大坂の陣に臨み、その権力基盤を引き継ごうとしたのか、そしてクラッソがそれらを、どのように眼差していたのかを論じる。

時は流れて一六一五年、内府様は、老いが深刻さを増し、病に蝕まれていることを自ら悟っていたのだが、そのような折に成し遂げたいことがあつた。將軍である長子の戴冠を確固たるものとしたかつたのである。それには理由があつた。かつて内府様によつて帝権を篡奪された秀頼が、内府様の死後に、父の帝権の再奪取という望みを必ずや果たさんとして、大坂の要塞化を進めていたのだ。こうした状況の先に待つものは、一触即発の事態である。内府は大坂にいる秀頼を包囲すべく準備を進めたのだが、力任せの行動に出ることは一切なく、計略に転じた。内府は秀頼とともに日本の異教神の下で宣誓し、和解したうえで双方の血判を以つて、和議の条件に署名したのであつた。内府は、「敵方の武將に」寝返るよう密かに手を回しつつ、精強な軍隊を率いて大坂を掌握したのだから、老君が仕組んだ合意

は、若君を欺くために機能していたということになる。そして大坂で起きた殺戮は、性別、年齢、善人か悪人かで見逃されるようなものではなかったため、殺す側の欲望が失せることは無く、むしろ右派「秀頼方」が疲弊するに至った。しかし、幾筋も立ち上がる炎のなかで莫大な財宝が消失したのであった。つまり、秀頼の父にして、この上なく吝嗇家の太閤様が、一時期この城塞内に貯め込んでいた財宝のことである。

幸運なことに秀頼は、北国の国々へと落ち延びて、生きながらえたものの、七歳になる「秀頼の」息子は、勝者の手に渡ってしまった。というのも、「太閤様の流れをくむ」王家の血が、暴君による統治を喉から手が出るほど望んでいないとも限らないため、「息子そのものの存在が」許されるものではないからである。では、これらの者ども「秀頼、国松、内府」のその後に話を移そう。自らが打ち首に処されることに気づいた童子「国松」は、物怖じする様子も見せず、「凶つたなっ！この内府めっ！」と叫んだのだった。その一方で当の内府は勝ち誇ったかのように大坂を破壊し、駿河へと去っていったものの、秀頼を生き延びさせてしまったが故に、手放しに勝利に酔うことはなかった。その後の内府はというと、日本にある城塞全てを破却するよう命じ、キリシタンとキリストのブドウ畑の小作人たちに<sup>108</sup>対しては、峻烈さを増した厳しい態度で臨んだのであった。つま

り、野蛮人どもの血が多く流れたのだが、「キリスト教の」信者の血も少なからず流れたのである。<sup>109</sup>

この「大坂の陣」の典拠はバルトリの八二四〜八二六頁、八二八〜八二九頁<sup>111</sup>であり、ルイス・ピネイロ (Luz Pinero) が著した『日本キリスト教諸事報告』<sup>112</sup>の五〇七〜五〇九頁の内容とも一致する部分<sup>113</sup>が認められる。クラツソの「家康伝賛」で、もつとも紙面が割かれているエピソードである。秀吉が築き上げた政権と家康の政権との最終決戦的な色合いを、読み込んでいた資料のなかにクラツソは感じ取っていたのだろう。また、クラツソは一七世紀西欧を取りまく政治状況と重ね合わせ、大坂の陣における家康の老獪な政治交渉術と、戦が多方面に及ぼす影響に関心を抱き、それを読者に伝えるべく、詳細に記したものとと思われる。

豊臣秀頼がイエズス会に比較的寛容であったために、イエズス会士たちは徳川家よりも豊臣家に好意を寄せていたと言われている。イエズス会士たちの残した記録には、豊臣方に同情的な記述が多く目に留まる。一方、クラツソが描く大坂の陣は、一概に豊臣方に肩入れしてはいない。むしろ家康の政治手腕を克明に描くことで、若手の秀頼とベテランの家康との対比が鮮明となり、家康の実践的な強かさが実用的な政治技術として強調されているという印象を与えている。豊臣家に好意的なイエズス会の言説をそのまま踏襲してい

るかに思わせつつ、実は家康に肯定的な立場を取るクラッソの政治観が巧みに組み込まれている。

大坂の陣に関わるイエズス会の特徴的な言説の一つに、秀頼生存説がある。秀頼がイエズス会に比較的寛容ゆえ、イエズス会が徳川家よりも豊臣家に好意的であったためと言われてきたが、実際は秀頼の最期については、ヨーロッパ側史料では当時から様々な説が唱えられていた。イギリス東インド会社平戸商館の初代商館長リチャード・コックス (Richard Cocks, 一五六六―一六二三) は、イギリス東インド会社本部宛書簡 (一六一六年二月二五日付平戸発信) において、秀頼の最期に焼死説と生存説、双方存在していることを伝えた。<sup>14)</sup> 当該戦乱の状況を伝える最初の本部宛書簡であり、大坂の陣が最終して半年以上経てもなお、秀頼の消息が定かでないことを明らかにしている極めて重要な情報である。また、オランダ東インド会社平戸商館商務員マティス・テン・ブルッケ (Marius ten Broeke, n.d.)、およびエルベルト・ワウテルセン (Eibert Wouters, n.d.) は、オランダ東インド会社平戸商館長宛書簡 (一六一五年六月一日付京都発信) において、秀頼が切腹したと報じている。<sup>15)</sup> その一方でクラッソと同時代のオランダ人アルノルドゥス・モンターヌス (Arnoldus Montanus, 一六二五―一六八三) の著書『東インド会社遣日使節紀行』<sup>16)</sup> が載せる「大坂の陣」の記述には、イエズス会の日本情報に拠りつつも、イエズス会の情報とは異なり、秀頼たちは焼死したと論じる。ドイツの

博物学者エラスムス・フランシシ (Erasmus Francis, 一六二七―一六九四) も、『海外諸国歴史芸術風俗新鏡』で大坂の陣を取り上げ、モンターヌス同様に秀頼焼死説を唱えている。<sup>17)</sup>

クラッソは、イエズス会経由の情報を採用して「大坂の陣」を記述し、秀頼が生き延びたと断じているものの、出版されていない書簡史料も含め、同時代史料では、焼死説・生存説の両論併記、あるいは生存説、切腹説、焼死説など、様々な説が入り乱れて記載されていたことがわかる。このような状況に鑑みると、一七世紀初頭のオランダ人、イギリス人の来日以降、ヨーロッパにおける日本情報の入手方法が、従前のイエズス会をはじめとした宣教師経由一択ではなくなったことが浮き彫りとなってくる。クラッソの「関ヶ原の合戦」と「大坂の陣」の記述を取り巻く日本情報の背景には、情報の質的な変化があった。また一七世紀当時のヨーロッパの出版界では、このような意図的な情報の取捨選択は珍しくなく、異文化イメージも実際のものとは少しずらずれていくこともよく生じていたのである。ここに引いた秀頼生存説はその好例であろう。

クラッソが「大坂の陣」を書くにあたり秀頼生存説を採用した背景からは、本稿冒頭で簡単に記したクラッソと文芸共和国の関係、つまりキリスト教道徳を基盤とした文芸共和国という緩やかな知識の紐帯のなかで醸成された、クラッソの異文化受容の特徴の一つをさえ感じ取ることができよう。

第四節 クラッソは徳川家康をどう記述したか

——幽冥より行く末を見守りし武将へ捧げられる賛辞

権力基盤構築の総仕上げとして、大坂の陣を制した家康。本節では最晩年の家康の様子を、クラッソがどのように咀嚼し、「家康伝賛」としてまとめ上げたのかを論じていきたい。

このような内府も齡七三を迎え、最期の時が訪れようとしていた。彼は、日本のなかでもっとも高い山に埋めてほしいと言を残した。内府が言うところでは、異教神の場合、当該人物が子々孫々に至るまで崇め奉らねたいがために、より天に近い場所に住ようとすること。一六一六年、内府は逝去した。

内府は中肉中背で、ふくよかな顔立ちではあったが、その眼差しは陰気だった。また、徳こそ備えていたものの、それを上回らない程度に、悪徳、野望、鷹揚さ、慎ましさ、狡猾さも垣間見せることがあった。内府は軍事力というよりも顧問団を抱えることで、より優位に立つことができており、異教神らに信仰を示す一方で、それらを冷やかすこともあったようだ。内府は「帝権」という賜物とともに、「跡目諍い」という置き土産も残して、この世を去ったのであった。<sup>19</sup>

当該箇所は、クラッソの言葉で書き改められているとはいえず、バ

ルトリの八三八〜八三九頁に典拠がある。もつとも、家康の人格を表す形容については、詳しい典拠は定かではなく、クラッソ自身の解釈を基に記されたものと思われる。秀吉の場合と同様、肯定的な見解は少ないが、支配者・権力者に必要な資質を家康が全て備えているという記述でもある。『君主論』でマキャベリは、「鷹揚さと吝嗇さについて」や善悪の使い分け等、人心掌握や国家運営に際しての冷静な判断の必要性を論じたことはよく知られている。クラッソの家康評にもマキャベリに近いものがある。徳川家康をめぐる全体のストーリーを通して、クラッソは支配者に必要な素養は何か、を伝えようとしたのである。

「家康伝賛」もまた「秀吉伝賛」と同様に、二つのラテン語による賛辞により締めくくられる。

聖ヤコブ騎士団員 カルロ・アンドレア・シニバルディ作

帝権のみならず、強大なる武力を以て磨かれし内府様、クルサスの猛々しき戦士たちを一蹴せむ。

正統なる後継者、そして従順なる王たちをもなぎ倒し、反駁者の首を刎ね、最も近しき武将らを掌握す。

信じ易き彼の者は、一神、否、数多の神々道づれに、彼我の神官葬らむ。

思慮深くも狡知に長けた内府様、その剛毅も勝るとも劣らず。

彼の如き数多の不備もいや増せど、彼の者としてみれば、斯様に做うも好都合。

「我死なば、揺るぐことなき泰山に、埋葬せよ」と命じたり。

彼の者は、天の果ての者なれど、極めて近き所におらむ。

愚者をして、斯くの如きに、気付くことなし。「オリンポス山は肉体に依りて登るに非ず。無垢の精神、かつ慈悲深き魂により、上り詰めるものなり。」<sup>121</sup>

市民法学者 バルトロメオ・クラッソ作

敏き魂持つ貴人、高き山の頂の、麓において、陵墓築造命じたり。

野蛮なりし内府様、死してなお、天と神とに比すれども、近きところにおわすなり。

而して、彼の治める蛮国は、開かれたるも、より醜くもあり。<sup>122</sup>

秀吉に捧げた賛辞を記した詩人二人が、家康の賛辞も詠んでいる。秀吉の場合と同様、家康の特徴やエピソード、つまり、善悪に惑わされず、冷静さと果断さを持ち合わせた支配者であること、山への埋葬を遺言としたことを小気味よいテンポで伝え、読者に家康のイメージを提示して「家康伝賛」は結ばれるのであった。

第五節 家康記述から浮かび上がるクラッソの思想とは何か

本章では、クラッソの「家康伝賛」は、「秀吉伝賛」と同様に、評伝の主人公の特徴をより際立たせるために、クラッソの求めている人物像へと典拠史料の記述内容が改変されて描かれていたことを論じてきた。クラッソは、秀吉の場合と同様に「偽りと欺瞞」、「本音と建て前」といった一七世紀イタリアの政治思想や統治術の文脈からの君主像を、家康という事例を通して提示しようとしたのである。バルトリもゲレイロも、そしてピネイロもイエズス会の活動報告の域での家康紹介に過ぎず、武将としての人となりなどクラッソの求めている情報全てを書くことはなかった。「家康伝賛」で度々見受けられたのが、典拠が不明の箇所であった。限られた紙面のなかでクラッソなりの言葉でまとめられたところもあり、「秀吉伝賛」以上に「家康伝賛」が、より濃密なクラッソの言葉によつて記されているのである。

「秀吉伝賛」では、クラッソによる「奇想天外な君主という驚異への眼差し」が発する熱量の多さに圧倒される感があったが、「家康伝賛」は、対照的に冷静沈着な指南書的な色合いが強い。家康のエピソードから統治術、政治交渉術における実践例を紹介していく形をとるからであろう。

クラッソは、「徳こそ備えていたものの、それを上回らない程度に、悪徳、野望、鷹揚さ、慎ましさ、狡猾さも垣間見せることがあった。

内府は軍事力というよりも顧問団を抱えることで、より優位に立つことができており」と書く。上記のような能力と性格を以て、石田三成襲撃事件と関ヶ原合戦を最小戦力で、大坂の陣を老獪さで、それぞれ乗り越えたことになる。「秀吉伝賛」と比べて華やかさを欠くが、同時代のヨーロッパでの教科書に載るような典型的君主であった「家康伝賛」に目を通した読者は、非ヨーロッパ圏にも自分たちが抱くような君主像をテキストを通して目の当たりにし、驚異と感じたであろうことは想像に難くない。

統治において何らかの功績を残した人物こそが人物伝には記載される。志半ばで斃れた織田信長は、貧民からのしががった秀吉や、安定した政治基盤を築き上げた家康と比較すると、見るべきものが少なかったが故に、『著名武将伝賛』の対象ではなかったのだろう。おそらくクラッソが信長を外した理由はここにあるのでは、という思いにさえ行き着く。「秀吉伝賛」「家康伝賛」を論じ終えたいま、クラッソの人物選定の見事さを痛感するのである。

おわりに

本稿では、ロレンツォ・クラッソが著した『著名武将伝賛』が描く、秀吉と家康に関わる記述を「驚異」という視点に力点を置いて論じてきた。

当該書での秀吉・家康の記述は、イエズス会関連図書である、フエルナン・ゲレイロ編『イエズス会一六〇〇—一六〇一年アジア・日本報告集』、ダニエロ・バルトリ編『イエズス会アジア布教史第二部 日本編』、ルイス・ピネイロ編『日本キリスト教諸事報告』などを主たる典拠にして大枠を設定し、不足情報はイエズス会土書簡集などからの引用で補って構成しようとしていたことが判明した。クラッソが情報を追い求めるよりも、自らの解釈と自らが求める物語の方向性に沿って、叙述を進める作業も行っていたことを明らかにし得たと思う。イエズス会の報告書という史書を中心に据えながらも、クラッソの文才が遺憾なく発揮されて書かれた『著名武将伝賛』は、文学作品になり得ているとも言えよう。

本稿を振り返りつつ記すならば、『著名武将伝賛』での秀吉と家康の評伝を通して、以下のようなことを読者に伝えようとしたのではないか。「秀吉伝賛」では、統治者、武将としての資質を備えるも、ヨーロッパでは認められない奇想天外な生涯を送った人物として秀吉を取り上げ、一方「家康伝賛」には、現実と向き合い粛々と判断を下していく統治者の姿、すなわちヨーロッパで理想とされた統治者像を提示し、非西欧社会にもそういう統治者がいたことを紹介しようとしていたのである。

秀吉、家康双方から、ベクトルが異なる、意外性に富んだ「驚異」への眼差しが読み手へ向けられる仕組みでもある。また、秀吉と家

康のそれぞれの叙述には出自の貴賤も触れられている。しかし、著述の中で統治者としての魅力を強調しているのだから、貴賤はもはや「記号」に過ぎないと言つてもよい。「驚異」のみ読み手のところに強く届くのである。そして、秀吉と家康が織りなす様々な対称により、提示される「驚異」はより増幅されていく。ナポリ随一の文筆家だったクラッソは、『著名武将伝賛』に秀吉と家康を配すること、洋の東西を超えて存在する類まれな政治手腕という「驚異」に時空を超えて賛辞を捧げていたのである、と結んでよかろう。

註

- (1) Lorenzo Crasso, *Eloggi di capitani illustri scritti da Lorenzo Crasso napoletano Barone di Pianura*, Venezia, presso Combi, e La Nou, 1083. (国際日本文化研究センター蔵)
- (2) ピアヌーラはナポリに西方に位置する町。
- (3) 北原敦編『イタリヤ史』山川出版社、二〇一六年、二九一―二九四頁。
- (4) 同右、二九四頁。
- (5) 同右、二九五―二九六頁。
- (6) Bendetero Croce, Giuseppe Galasso (a cura di), *Storia dell'età barocca in Italia*, Milano, Adelphi edizioni, 1933, pp. 142-144.
- (7) *Biografia universale antica e moderna ossia Storia per alfabeto della vita pubblica e privata di tutte le persone che si distinsero per opere, azioni, talenti, virtù e delitti*. Vol. XVI. Venezia, Gio. Battista Missiaglia, 1823, pp. 86-87.
- (8) *Ibid.*, p. 87.
- (9) Michele Giustiani, *Lettere memorabilia dell' Abbate Michele Giustiniani vol. 1-3*,

Roma, Nicol'Angelo Trnassi, 1667-1675.

- (10) *Ibid.* vol. 2, pp. 353-355.
- (11) *Ibid.* vol. 1, pp. 472-474.
- (12) カンパニョーラ、フランチェスコ「文芸共和国」の分断——学問の共同体における制度と個人」、岡田温司研究室編『ディアファネース——芸術と思想』、二〇一四年、五二頁。
- (13) 同右、五二頁。ヘイルは、一六九七年に出版した『歴史批評辞典』において日本に関する記述を数多く掲載している。Pierre Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, 2 vols. Rotterdam, chez Reinier Leers, 1697. なお、国際日本文化研究センターには一七二〇年版 (4 vols. Rotterdam, Chez Michel Bohm, 1720) が収蔵されている。日本関係記述は、一七二〇年版の一五三二―一五三四頁を参照。
- (14) *Ibid.* *Lettere memorabilia dell' Abbate Michele Giustiniani vol. 1*, p. 474.
- (15) Pompilio Torti, *Ritratti et elogi di capitani illustri*, Roma, Andrea Fel, 1635.
- (16) 「読者への辞」の末尾では、『著名武将伝賛』第二巻執筆への意欲も示しており、伝賛計画の熱意を知るよすがとなっている。
- (17) ジョーヴィオの略伝、業績、著作概要については、下記参考文献を参照した。
- 和田咲子「十六世紀トスカーナ大公の肖像画コレクション」、長田謙一編『収集・展示・への』から〈美術〉へ…平成11年度〜13年度(社会文化科学研究科プロジェクト報告書第四四集)』、千葉大学大学院社会文化科学研究所、二〇〇二年、二一―三頁。
- (18) Tiratano Bocalini (1556-1613)、『イタリヤ人著述家』
- (19) ns E.VI.24, nr. 78, Genova, Biblioteca Universitaria.
- (20) 同時代の他のテキストに目を向けてみると、大まかな見当だけはつけられる。クラッソの同時代人で、ナポリを中心に活躍した著述家ドメニコ・アントニオ・パツリーノ (Domenico Antonio Parino, 一六四二―一七一六)



による一六九四年の著作『ナポリ王国副王伝』では、ナポリ王国副王のオニエーテ伯イニゴ・ヴェレス・デ・ゲヴァラ (Inigo Vélez de Guevara, 一五九七—一六五八) の評伝とともに肖像画が掲載されている。『著名武将伝賛』に掲載されている秀吉と『ナポリ王国副王伝』のオニエーテ伯を比較してみると鼻の形や角度、とりわけ目において類似点があるように思われる。『ナポリ王国副王伝』のタイトルページには、「王宮の通廊の一つを裝飾した者たちの手により、銅版画による副王の肖像画が制作された。」と明記されており、歴史に名を残すことのなかった、工房の職人らの手によって、当該肖像画が制作された可能性があることを、指摘しておきたい。

- (21) Fernão Guerreiro, *Relaçam annual das consas que fizeram os padres da companhia de Jesus na India* 5<sup>o</sup> Lapa nos annos de 600. 5<sup>o</sup> 601. 5<sup>o</sup> do processo conversã, 5<sup>o</sup> Christianidade da *quellas partes, tirada das cartas gêneas que de la vierão pelo padre Fernão Guerreiro da Companhia de Jesus*. Evora, Manoel de Lya, 1603. 国際日本文化研究センターには、一六〇四年に出版されたスペイン語版が収蔵されている。

- (22) Danilio Barroli, *Dell'istoria della Compagnia di Gesù II Giappone seconda parte dell'Asia descritta dal P. Danilio Barroli della medesima Compagnia*. Roma, Stamperia D'igratio de' Lazzeri, 1660. 国際日本文化研究センターには、ジェノヴァの Stamperia di Benedetto Guasco より一六五六年に出版された第一部が収蔵されている。

- (23) 当然ながらクラッソはバルトリだけを読み、ゲレイロを参照しなかったところも十分あり得る。

- (24) Fasciba Cichidono  
 (25) Il Regno di Mino  
 (26) Iro  
 (27) ne' rischi il primo  
 (28) Nobunanga  
 (29) *Id., Elogi di capitani illustri*, pp. 1-2. "Questi e' l'arcosama, quel grande Imperador del

Giappone, che se'l consideriamo prima del Principato, pieno più di virtù, che di vizi, e dopo il Principato più di vizi, che di virtù, possiamo dirlo Uomo certamente degno d'Imperio, se non hauesse imperato. Nacque l'arcosama, primieramente appellato Fasciba Cichidono, nel Regno di Mino, di vil sangue, più pouero d'vn Iro, appena hauendo per coprir le nude carni vna stuoia; onde per comperare il cibo, sola vender legna nella Città, portate sù le spalle da' boschi: Annotato dalla pouertà, da' villerecci exerciti, lassio la scure, e pigliò la spada, e superando con l'animo grande la bassa nascita, andò a militare nella guerra del Rè di Mino. Senza timor di morte, ne' rischi il primo, aprissi nelle battaglie ampia strada agli onori, alla Gloria. Ricuccio dal Rè; ma più dal suo valore, il titolo di Capitano, con prosperosa fortuna arriuò ad esser Generale di Nobunanga Imperador del Giappone."

- (30) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 243. "Fasciba dunque Cichidono, naturale del Regno di Mino, fu per origine, di finissimo sangue plebeo; e campana sua vna facendo legna al bosco, e recandone i fasci in ispalla a vendere nella città: vesito, o piu tosto ammagliato in vna stuoia, poiche altro non hauea con che nasconder le carni, e ripararsi dal freddo; ed egli poi sola raccontarlo, prouando, che douea tutto alla sua virtù, niente alla fortuna. Era piccolo di persona, etian dio fra Giapponesi, che poco s'alzano in istatura: ma compresso, e membruto, da reggere a ogni fatica; e in vna mano hauea sei dita. Di fattezze in volto sozzissime, e horribili a vedere, tal che appunto pareua scoppiato da vna querchia, e huomo saluatico, senon che hauea poca barba: e gli occhi brutamente sporti in fuori. Annoiaco di quel suo mestiere, di fare, e vendere legna, cambiò vita, e tutto insieme fortuna: perche, passato dalla scure alla spada, soldato in seruigio del Re di Mino, come era huomo di gran forza, e di gran cuore, cola, doue le battaglie si conducono piu che altramente, al menar delle scimitarre, fece della sua persona marauigliè, e cominciò a montare a salti, dall'imo al sommo de gli honori, e de' carichi in guerra. Capitano, condottiere d'exercito, Generale dell'armi di Nobunanga." 「美濃出身の羽柴筑前殿は、元々は平民のなかでも高貴な血筋

の出であつたが、森で拾つた薪を束にして、それを担いで街で売り歩き、露命をつないでいた。身に着けている衣服は、細い紐で結わえただけの一枚の筵といった有様で、肉体を隠したり、寒さから身を守る術を他に持ち合わせないなかつた。彼にはそうしたことを結び付けて考えるところがあり、運は全くの無意味で、力こそが全てであると確信を深めていくようになっていた。背丈が低い日本人のなかでも、彼は小柄な体格ではあつたものの、数々の困難を乗り越えてきただけあつて、その体軀は引き締まり、手足もがっしりしていた。片方の手には六本の指があつた。顔つきの中でも目鼻立ち、見た目でいうところ、汚らしくて、おぞましくすらあつた。そうしたこと故に、彼の出で立ちには、まさに樅木から割つて出てきたようであり、少しでも髪をたくわえていたものの、田舎者そのものにししか見えなかつた。彼の醜い面目は、外側にはみ出してゐた。拾つた薪を売る生業に嫌気がさした彼は、自らの人生も運命もすべてを一変させた。というのも、斧を剣に持ち替え、偉大な権力と胆力を持ち合わせた美濃の王のもてで軍務に就くと、刀を振りまわしさえすればよいのだと命じられる数々の戦場で、目覚ましい働きを見せたのである。すると貧民から栄光と軍役の頂点へと一足飛びに駆け上がり始め、武將、すなわち軍指揮官、信長軍の將軍にまで登りつめたのである。」

(31) Luis Frois, *Livrea Annuae Japonenses Anni 1591 Et 1592*, Coloniae Agrippinae, Henricum Falckenburg, 1596, p. 6. "Neque enim ei satis est ad fastigium omnium dignitatis ascendisse, ex abiectissimo vitæ statu, qui erat, secare ligna, humerisque ea in forum deferre, venumque exponere, vi haberet panem quotidianum." 「関白殿は、かつては木を伐り、それをかたに背負つて町へ運び、それを売つて毎日の糧を得ていたほどのひどく卑賤な身分から全権力への高座へと登つた」(松田毅一監訳『十六・十七世紀 イエヌス会日本報告集 第一期第一巻』同朋舎出版、一九八七年、二〇六頁)。当該年報は *De rebus Japonicis Indictis, et Peranis epistole recentiores*. (John Hay, ANTIWERPIAE, Ex Officina Martini Nutij, ad

insigne duarum Cleoniarum, 1605, 国際日本文化研究センター蔵)にも所収されている。

(32) Amangucci

(33) Moridono

(34) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 2. "Nell'aspra guerra di Nobunanga con Moridono Rd'Amangucci, mostrandosi or prudente nella tardanza, or sagace nella celerità dell'imprese, tante vittorie ottenne, quante furono battaglie, e tor seppa à Moridono cinque Regni di tredici, che n'hauea. Morto infelicemente Nobunanga, seguì con occulti fini la Guerra contro il Rè d'Amangucci, acciò che sù le ruine di questi fabbricar potesse più facilmente la gran macchina del Principato, e così auuenne, perche il costrinse alla pace, e à rendergli tributo, e questo fu il principio della sua vasta grandezza."

(35) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 243. "e per lui era in battaglia con Achino Mondono Re d'Amangucci; e di tredici Regni, cinque già ne hauea conquistati, e dua su gli altri, quando gli venne corrieri col'annuncio della morte di Nobunanga." 「信長の訃報が彼のもとに舞い込んだ時、山口王、安芸の毛利殿との戦いのなかにあり、多方面とも対峙しながら、毛利殿が領有する一三ヶ国のうち五ヶ国を既に攻め落としてゐた。」

(36) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, pp. 243-244. "mentre era tutto in vincere per Nobunanga, era anche tutto in pensare, come di poi vincere Nobunanga. È fu ben tratto da quel sauiò huomo ch'egli era, ma sauiò alla Giapponese, cioè tutto arte, e simulatione, da fingersi quel che non era, il non accorrere a Meaco subito che ne intese la morte di Nobunanga. Anzi, si diè a fare più che mai grandi mostre, di volersi rimanere in Fatima, a proseguirui la guerra, sino a mettere in vltima distruzione il Rè d'Amangucci: con la quale apparenza, in pochi di li condusse a quel che solo hauea in disegno, di costringerlo col timore a venir seco in accordo di pace, e giurarli si tributario degli otto Regni, che gli rimaneuano franchi." 「羽柴が信長のため勝利

を収めることに全力を注ぐ一方で、いかにして信長を乗り越えていくかに ついても、必死に考えていた。羽柴は賢人により、良い風に描かれること がある。つまり、愚か者を演じられるような日本的な技術、見せかけの態 度、あらゆる点において、羽柴は賢明な人物であると。だから、羽柴は信 長の訃報にふれても、一目散にシヤコへ駆けつけるようなことはしなかつ たのである。むしろ大きく振舞うようにと努めたのである。つまり、山口 王を最後まで叩きのめし、戦を完遂させるまで播磨に留まることを望んで いるかのように振舞ったのだ。しかし、外面的には上記のように見えてい たものの、羽柴は一日も経たないうちに、かねてより唯一画策していた行 動に打って出たのである。恐怖を以て和議を迫り、山口王の領土のまま だった八ヶ国の貢納義務を山口王に飲ませたのだ。」

(37) Meaco

(38) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 2. “Ma perche sapea, che l’amicizie erano il sostenimento dell’Imperio, amò, ò finse d’amar gli Amici, finche seruitronli ad aggrandirlo, odolioli poi come potenti, per pagar d’odio i benefici. Formidabile a’ vicini, famoso a’ lontani, và con poderoso exercito à Meaco Metropoli dell’Imperio, spargendo fama di vendicar la morte del suo Imperadore.”

(39) 織田信忠（一五五七—一五八二年）。

(40) 織田秀信（一五八〇—一六〇五年）。

(41) 織田信雄（一五五八—一六三〇年）。

(42) *La forza d’Anzuciana*

(43) Sançidono. 織田信孝（一五五八—一五八三年）。永禄二二年（一五六八年）、神戸具盛（友盛）の養嗣子となった。以後は神戸三七郎を名乗っている。

(44) Vocucci: 羽柴秀勝（一五六九—一五八六年）。幼名は於次、於次丸。天正四年（一五七六年）、羽柴秀吉の養嗣子となる。

(45) *Id., Elogi di capitani illustri*, pp. 2-3. “Per mostrar finezza d’amore, e sonna fedelta verso il real sangue, vuol esser Tuore del picciol fanciullo del Primogenito di

Nobunanga, e’l manda nella fortezza d’Anzuciana in custodia del Secondogenito, Huomo pazzo, doue con lui altri fanciulli della sua età s’alleanano: Al terzo, chiamato Sançidono, dà il Regno di Mino, e al quarto, nominato Vocucci, la speranza della sua eredità, adorandolo in figliuolo. Conoscendo, che i Grandi dell’Imperio temon della sua potenza, g’inganna con l’apparenza del ben publico, e ordina vna gran pompa funera alla memoria di Nobunanga, e fino nell’azioni.”

(46) *Id., Dell’istoria della Compagnia di Gesù*, p. 244. “Tercio tutto si diede a nuouvi uffici di fedeltà, e d’amore, mostrandosi spasmare del suo Nobunanga, e di volerne

mantener nel suo sangue la signoria de’ Regni, che s’hauca acquistati: e per farlo, s’intitolò Tuore del pupillo herede, ch’era vn fanciullino di tre anni, figliuolo del primogenito di Nobunanga, e’l mandò all’euare nella Fortezza d’Anzuciana, in guardia del secondogenito di Nobunanga, scemo di cervello, e piu da catena, che da corona. A Sançidono, il terzo, diè in sua parte il Regno di Mino: poi gli leuò tutto insieme la corona, e la resta. Il quarto, per nome Vocucci, se l’adottò, per non pronedello come principe, mentre finge di volerlo suo herede, come figliuolo. Tutte apparenze di pietà, e mostre di gratitudine alla memoria, e al merito di Nobunanga: e allora gli erano necessarie, per guadagnarsi l’amore de’ popoli, e dar sembianze di giustitia alla guerra...:「けれども、皆は忠誠と愛に基づいた新たな職務に専念するようになった。忘れようにも忘れられない信長への思い、信長が獲得した国々を彼の血統のもとで統治しようとする願望を示そうとしたのである。また、そうするために、後見人が必要な相続人、つまり信長の長子の三歳になった息子であるが、その彼の後見人を、羽柴は自称するようになった。羽柴は童子を、信長の次子が警護についている安土城へと送り、そこで養育することした。なお、次子は物分かりが良い方ではなく、王位に就くというよりも鎖に繋がれている方が相応しい人物であった。羽柴は、三子の三七殿に対し、美濃を彼の領地として与えたのだが、後に王冠と頭も一緒に三七殿から全てを取り上げている。於次という名の四子については、息子の

ような相続人を欲するふりをする一方で、彼が君主にならないように対策を講じ、羽柴は於七を養子としたのだ。信長への慈愛や、信長との思ひ出や感謝の念は、すべて表向きのものであったとはいえず、秀吉にとつてこれらは、戦争の大義、民心掌握のためには不可欠だったのである。」

(47) *Id.*, pp. 244-245. “E quanto al debito, che pure hauea con Nobunanga: come huomo di coscienza ch'egli era, ne saldò le partite con l'anima sua, pagando a' Bonzi del Monistero di Murazachi, ch'era vn quarto di lega fuor di Meaco, dieci mila ducati, da spendere in celebrargli sollemnissime esequie. Percio, tre mila Bonzi si adunarono, secondo varie sette, in varie diuise d'habito: tuti con dall' vna spalla all'altro fianco attrauersa vna stola di drappo d'oro broccato. Dopo essi, le lor Dignità, i lor Pretai ponteficali, con in mano, ciascun di loro, vna corona di pallotole di cristallo. Appresso ogni ordine, e grado di nobiltà, fino à Principi e Re non in gramaglia, come a mortorio, ma addobbati alla sollemnissima, come ad vna canonizzazione. Finalmente, la bara, per materia, e per lauoro, cosa a vedere maestosissima in cui si portaua (poiche altro non ne riniueua) la gloriosa memoria di Nobunanga: e le andaua innanzi l'asciba a piè tutto diuoto, se non che teneua in vna mano la scimitarra di Nobunanga, mostrandola ignuda, non si sapeua bene se per cerimonia, o per minaccia...” 「羽柴には、信長に課せられていた義務があつた。羽柴は分別ある人間として、信長の魂との駆け引きに決着をつけたのだ。シヤコから一キロメートルほど離れた場所に位置する紫の僧院の坊主たちに、一万ドゥカート払い、信長のために、極めて荘厳な葬儀を挙行したのであつた。葬儀では、様々な宗派、様々な衣装に身を包んだ三千人の坊主たちが経を唱えた。どの坊主も、金色の錦で彩られた緞子の祭服用ストールを、片方の肩からもう一方の腰まで横切るようにかけていた。彼らの後ろにいる、高い地位にある者たち、司教や教皇にも値する高位聖職者たちがそれぞれに手にしているものは、水晶の小さな球でできた数珠一つであつた。貴族たちは各自の階級や身分にしたがい続いており、君主や王でさえ葬幕のなかに入らなかつた。質素

な葬儀ではあつたが、非常に厳かに装飾され、列聖式のようであつた。材料と手間、双方の面において、「信長の」棺は限りなく荘厳さを帯びていた（だから、そこには誰もいなかった）その棺には、信長への栄えある追懐が添えられていた。羽柴が棺の前を裸足で進み、参列者たちが続いた。羽柴は信長の刀を、むき出しのまま片手で持つて掲げていた。これが、儀礼的なもののなか、あるいは脅迫じみたもののかは、よくわかつていない。

(後略)」

(48) soldatesca

(49) il Rè Moridono

(50) 備前、備中、美作か。

(51) *Id.*, *Elogi di capitani illustri*, p. 3. “e per regnar violando ragione, mostrasi tutto del picciol Rè per priuario del tutto. Guardagnatosi il Popolo con l'abbondanza, co'donauiti l'Esercito, e gli altri con la speranza di felice godimento, fa inghiorrire improouisamente la seruitù. Fabbrica in Meaco nuoue Fortezze, altre ne toglie a Possessori, raguna soldatesca confdente, e a que' Capitani, e Reggitori dell'Imperio, giudicati da lui nimici, perche nimici della sua ambizione, toglie barbaramente la vita. Costringe il Rè Moridono a donargli tre Regni, altri spogliati de' lor Dominij, ad ardersi viuì, a scgarsi il ventre, secondo il costume giapponese, perche, mentre pugnano separati, son tutti viuì, e tanto opera con lo rgegno, e con l'armi, che nel corso d'vn anno trouasi di trenta Regni signore, e più remuo, che amaro.”

(52) *Id.*, *Dell'Historia della Compagnia di Gianu*, p. 244. “Fà egli venne fatto, che in brieve tempo, tra per fortuna, e per valore, piantò nuoue Fortezze intorno a Meaco, e conquistò le possedure da gli altri. De' suoi auuersarij, parte n'hebbe a' pie supplicheuoli, e renduti alla sua mercè: parte presi a forza, condannò ad obbrobrosi supplicij: oltre a non pochi, etiandio Re, che condusse a quell'ultimo ato della disperatione, e della generosità Giapponese, di segarsi in croce la pancia, e ardersi mezz viuì. Costrinse Moridono a donargli tre Regni, se non volca perderne otto. Altri, prima

che loro li togliasse, glie li donarono. In men d'un anno parte d'acquisto, e parte di spontanea suggestione, n'hebbe trenta in signoria. Allora cominciò a non haver più bisogno di fingersi amministratore dell'Imperio, e se ne dichiarò alla scoperta padrone." 「幸運と武勇も相まって、羽柴は短期間のうちにミヤコの周辺に新たな城塞を築き、他の者たちの領国を侵略した。羽柴と反対の立場にあつたものなかには、慈悲と哀れみに訴えるものがいれば、力で何とかしようとするものもいた。羽柴は無様にも命乞いしてきたものにたいして罰を下した。また、決して少なくない王たちが、絶望的でもいかにも日本的な高潔さを帯びた最後の行動に打つて出た。彼らは腹を十字に切られ、生きたまま火炙りにされた。羽柴は毛利殿に三ヶ国を差し出すように命じたのだが、八ヶ国取りたいとも思っていた。他方で羽柴が彼らから領国を奪い取る前に、彼らは羽柴に領国を差し出していた。一年も経たないうちに、征服した国もあれば、自発的に恭順を示す国もあり、三〇国を支配下に収めることとなった。このようにして羽柴は帝権の管理者を振舞う必要がなくなり、見出された庇護者を高らかに名乗るようになったのである。」

(53) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 3. "Del 1585, sdegnando il nome di Fascba, portato con la bassezza de' Natali, prende quel di Cambacu, che significa Arca di tesoro: E perche nel Giappone niun titolo è legittimo, se no'l concede il Dairi, piglia di questi per isposa una parente, e del 1592, rinunciando a vn suo Nipote il titolo di Cambacu, assume l'altro di Taicofama, che vuol dire Signor supremo, nè questo anche bastandogli, procura que' titoli, che son douuti a vn Dio."

(54) *Id., Lieme Annuee Iaponeses Anni 1591 Et 1592*, p. 26.

(55) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 3. "Per ostentazione di Pietà, dona a' Bonzi del Monistero di Murazachi, sponitori della falsa Religione de' Gentili molto danaio; ma poi, non credendo a vn sol Dio, e burlandosi di molti, spezza idoli, arde Templi, e fa macello de più creduli Bonzi."

(56) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 3. "Tollerà Chiese, abbraccia Religiosi, faucella bene di

nostra fede; ma d'auaritia, ch'è di libidine sozzo, menando vita tra Concubine, dice, ch'è impossibile ad osseruarla, perche troppo secura, nè sua tolleranza nasce da un vero conoscimento, ma dall'utile de' mercatanti Cristiani, e dall'aiuto di questi nelle sue guerre."

(57) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 246. "Fauori i Christiani, e la Fede, poi li perseguì: nè questa varietà fu incostanza: ch'egli sempre andò a regola d'un medesimo, e solo principio che hauea di valersi di tutte le cose, quanto ben gli tornauano all'interesse." 「羽柴はキリスト教徒とその信仰を支持していたが、後に彼らを迫害した。このように様々に起きることは、一貫性を欠いているというわけではなかった。つまり、彼は常に同じような決まり事を命じていたのである。羽柴に良い利益をもたらすもの、全てはここに通じてくるということが唯一の基本原則なのだ。」

(58) *Id.*, p. 247. "Fascba poi, se non abbracciana la Fede, almeno riuertua la virtù de Christiani.... Nè è da marauigliare, che così ragionasse vn Fascba, che si teneua trecento concubine in palazzo, e cento venti altre giouani, che il seruivano per sicurezza, e per diletto:"

(59) 大友義純 (一五五八—一六一〇) のこと。

(60) *Id., Elogi di capitani illustri*, pp. 3-4. "Simando breui i confini del suo Imperio, non essendo mai sazia d'acquisti l'ymana ambizione, arma trecento mila combattenti per soggiogare il Corai, vincer la Cina, e rendersi tributarie l'Isole Filippine. Rinuncia finalmente il suo Imperio al Nipote per tor l'altrui. Manda prima una parte d'Esercito a' danni del Corai, artua egli poi colà con oste più poderosa: Fugge il Rè nella Cina, i Popoli ne' monti, e resta Taicosama vincitore, e Signor del Regno: ma non scruendosi appieno della Vittoria nel disfacimento de' Nemici, calan questi a guida di fiere arabbiate da' monti, e insanguinandosi ferocemente le mani ne' già Vincitori, riducongli a ritirarsi nelle marine incontro al Giappone: E perche il Re di Bungo portossi vilmente nelle fazioni, vien da Taicosama priuato del Regno, e dato a

Moridono Re d'Amangucci:"

(15) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gizen*, pp. 333-335. "E già si auuiciana il tempo da lui prefisso alla tanto lungamente pensata, ma piu che non si credeva, malagevole impresa, di soggiogare il Corai, e la Cina, e rendersi tributarie le isole Filippine. Perciò hauea sotto l'armi dugento mila soldati, e cento altre mila da ogni seruigio a' bisogni di guerra. E quanto alle Filippine, egli si crede uincerle, senza combatterle, sol mostrandosi armato, ... a cinque di della Luna di Gennaio del 1592. condotto innanzi al Dari, Inangondono suo nipote (perche egli era senza successione di figliuoli, morro gliene poco auanti vn solo che hauea bambino di due anni) il fe' solennissimamente inuestire del titolo di Cambacudono, e dell'uniuersal signoria dell'Imperio Giappone: egli si fe' nominar Taicò Sama, cioè Gran Signore: ... egli solo entrasse a portar l'armi, rompere le prime bataglie, e hauer le prime vittorie de' nemici: i Re, ei Principi del Giappone, passarono a far guerra al Corai: perche o v'eran rotti, come la fortuna dell'armi è incerta, e vi perdeuano i sudditi, senon anche la vita: ... Due volte combatè a campo aperto, e sbaraglio, e sconfisse, l'vna uenti, l'altra ottanta mila nemici: cacciò il Re fin dentro la Cina, e n'hebbe a sacco la Reggia di tutto il Corai, fortissima, e ricca: ... Fuggio il Re, e uinse le principali Fortezze, non s'hebbe piu incontro d'esercito, che s'affrontasse, onde, come in campo libero, e aperto, s'andò oltre, fino a toccare l'ultimo dell'Orancai, che sono le confini del Regno, di verso la Tartaria, e piantarui le insegne di Taicosamita: Nè piu s'auanzò vn passo auanti: anzi la fortuna girò, e diè uola indietro, ... il rifuggirsi tutta la gente del Corai alle cime de' monti talche a' Giapponesi punto altro non rimaneua, che le mura delle città, e delle case, vuote d'habitatori: ... Poi al primo romper del uerno quando, per gli horribili uenti che tengono in gran fortuna quello stretto di mare, non si poteuano dal Giappone tramandar soccorsi, nè di munitioni, nè d'huomini, calò impouiso tutta quella moltitudine arrabbiata, giu da monti, ad vnirsi con dugento, e piu mila Tartari: e Chinesi, mal destri ueramente la maggior parte di loro a maneggiarsi in campo, per le

troppo graui, e fortissime armadure di che eran guerniti da capo a piè, ma a combatter piantati, sì buoni, che quante uolte i Giapponesi vi si prouarono, n'hebero le peggiori, ... Così tra per la fame, che ne consumò piu di trenta mila, si che pareua esser girata nell'esercito la pestilenza: e per la brauura, e moltitudine troppo excessiua de' nemici, che ogni di piu ingrossauano, costretti d'abbandonare cio che dentro terra haueano conquistato, si chiusero in numero di quaranta sette mila, dentro le Fortezze piantate in riu a mare, dirimpetto al Giappone, e trattaron di pace: ... non mai fuggendo, ma con equal maestria, e prodezza, combattendo; e ritirandosi, come oppresso dalla moltitudine, non uinto dal valor de' nemici, ch'erano a dieci per vn de' suoi, ... ed egli, e gli altri ch'erano di sua condotta, ne furono largamente remunerati. Solo il Re di Bungo D. Costantino (quel poco auanti apostata, poi riconciliato con la Chiesa, e l'vno, e l'altro per interesse) perche senza ne pur vedere il uolto, non che prouar l'armi de' Tartari, s'era uilmente fuggito, e hauea lasciate in abbandono tre Fortezze, comessesegli a guardare, onde tutto l'esercito ne fu in punto di perdersi. Taicosama, suerregnarolo come vn vil mascalzone, il priuo del Regno, e diello a Moridono Signor d'Amangucci: "「太閤様には長い間考え抜いたことがあり、それを実行に移す時が近付きつつあった。全く信じられないことなのだが、高麗、中国を支配下に収め、フィリッピン諸島には貢納を課すという骨の折れる事業に乗り出したのだ。そのようなこともあり、太閤様は二〇万の兵力と、それとは別に戦時に必要な従者一〇万を用立てていた。太閤様は、フィリッピン諸島には武力を誇示すれば戦わずして勝利できると信じていた(中略)一五九二年陰暦の一月五日、内裏の面前に罷り越した、太閤様の甥の大納言殿(太閤様には二歳になる嫡男がいたのだが、少し前に亡くなっており、嫡男がいない状態であった)は、極めて敵かな雰囲気なかで、日本の帝権の全支配権を名乗るようになった。太閤様は、太閤様すなわち偉大なる支配者を名乗るようになった。(中略)彼「アゴステイノ…小西行長」は武力を以て単騎で「高麗に」乗り込み、初戦で敵方を撃破した。し

かしながら、武運とは不確かなもの。高麗に攻め込んだ君主や王たちは一敗地に塗れて、臣下も自らの命も失ってしまった（中略）アゴステイノは開けた土地で二回ほど戦いに挑み、二万と八万から成る敵方を敗走させ、圧勝を収めた。そして中国の内部にまで「高麗の」王を追いやり、高麗全土にあつた堅固で豊かな王宮を略奪したのであつた。（中略）アゴステイノは「高麗の」王を敗走させ、いくつもの主要な城塞を落としたのだが会敵することはなかった。もう一方の軍勢「加藤清正の軍勢」は、開かれた平原を突き進むかのように、オランカイの端に接する地域にまで駒を進めた。オランカイはタタールとの国境地帯であり、軍勢はここに太閤様の旗を立てたのであつた。しかしながら、これ以上、軍勢を進めることはなかつた。むしろ運勢の風向きが変わつたと言ふべきか、逆風が吹いたのである。（中略）そのために、市内、家の中ともに住民はおらず空っぽで、日本人以外は誰もいない状態となつていた。（中略）春に起きた最初の破壊の後、大変な幸運とも言うべきか、凄まじい風が海峡を襲つた。これにより日本から援軍も軍需品も人員も送り込むことができなくなり、怒りに任せた大勢の者たちは一同突如として山を下り、タタール人、中国人二〇万と合流した。彼らの主力が戦場に展開すると、実際のところ巧みに欠けるところはあつたが重装にして頭からつま先まで極めて強固な武装を施していたために、戦場によく踏みとどまつて善戦したのであつた。日本軍も何回かそこで張り合つたものの、苦境に陥つていつたのだつた。（中略）このようなこともあり、飢餓状態のために太閤様は、三万の軍勢を消耗しており、軍勢内にベストでも投げ込まれたかのような有様であつた。勇敢にも敵方はどんどん膨れ上がり過剰ともいえる勢力と化していった。「太閤様の軍勢は」占領地内で得たものを放棄せざるを得なくなり、四万七千の軍勢が日本を背にした海沿いの城塞に籠城し、和平交渉を進めるに至つた。（中略）アゴステイノは決して逃げ出したりはせず、巧妙さと武勳を以て戦いを続けたものの、「敵方の」勢力に押され、撤退することとなつたものの、

兵力差が一対一〇に開いていても、敵方の武勇に屈することはなかつた。（中略）アゴステイノはじめ、他の武将たちも、太閤様の指揮下にあつたものは、犠牲を厭わず太閤様の恩義に報いんとしていたのだつた。豊後の王、ドン・コンスタンティノ（この少し後に棄教したものの、互いの利益のために、また教会と和解している）だけは、素顔を見せることもせず、タタールの軍勢と対峙することもなく、最終的には逃げ出した挙句、三つの城塞を放棄した。太閤様は彼を監視下に置き、豊後の王の軍勢は全て召し取られることとなり、豊後の王を悪意に満ちた無礼者として辱めると、彼の領国を召し取り、山口の毛利氏の預かりとした。」

(62) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 4. "Del 1595. A morir Cambacudono suo nipote con fama di tradigione: ma la cagion della morte fu, ch' essendogli nato in vecchiezza un figliuolo, stimualo poco sicuro nella succession dell'Imperio, viuendo Cambacudono, e con lui fa veder i figliuoli, Amici, e Seruidori.

(63) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, pp. 366-367. E in prima, della morte del nipote Cambacudono, che in prima si esegui, cioè nell' Agosto del 1595. Già da due anni era nato a Taitosama vn figliuolo, e auuegnache egli vecchio di horamai sessanta anni, e in dispetto a tutti, non potesse sperare di lasciarlo morendo in età capevole di sostener a che egli con tanta forza d'arni, e tanta maestria di senna, appena bastaua: quell'Imperio, pure l'amor paterno ingannandolo, il persuase, che si, il potrebbe, commentandolo alla fede, e al sauto governo d'vn Canaliere christiano, suo lealissimo seruidore. Per cio fare, gli conuenia discredare Cambacudono, anzi, per non lasciar dopo sua morte al figliuolo vn competitor dell'Imperio e per cio neimico, vederlo, e toglielo d'infra i piedi... gli fe' scannar tre figliuoli, e trenadue mogli, poscia d'altri amici, e di sua Corte, tutti insieme vna moltitudine d'otramasi suenurati... "太閤様の甥、関白殿の死についてとりあげよう。これが起きたのは、一五九五年八月のことであつた。年老いた太閤様は、当時六〇歳を迎えていたにもかかわらず、生まれた息子は、既に二歳となつていた。皆に軽蔑の眼

差しを向けられるものの、息子が強力な軍事力と冴えわたる判断力を兼ね備え、十分と言えるほどに帝権を支えるような分別がつく歳になるまでは、息子を放って死んではなるものかと思っていた。同時に父の愛は、関白殿を裏切ることにもなり、彼に信頼を寄せつつも、キリシタンの騎士による賢明なる統治に彼を託し、息子の忠実な僕となるよう、関白殿を説き伏せたのである。そうしたことから、太閤様にとっては、関白殿を廃嫡するのが好都合ということになる。太閤様の死後、帝権の競争相手、つまり敵を息子に残さないために、関白殿を殺し、足元まで彼を取り去ることが理に適っていたのである。(中略)太閤様は、関白殿の三人の息子、三二人の妻次いで友人、側近、ごうと数えて八六人の不幸なものたちも一緒に虐殺した。」

- (64) *Id., Ellogi di capitani illustri*, p. 4. “Volge il pensiero a perpetuar la memoria delle gloriose sue geste, e alza macchine smisurate, non inferiori forse a quelle de’ Greci, e de’ Romani; ma cadon con tristo agurio per causa d’vn tremuoto. Sazio di combatter con gli huomini, vuol anche combatter con Dio, volendo distruggere la Cristiana Religione, perloche molti riceuon la corona del martirio. Rallenta poi la ferezza, piu per timor de’ Portoghesi, che per natural pietà.”

(65) la notte de’ sei d’Agosto

(66) Geiaso

(67) nouello Dio dell’armi

(68) Scinfaciman

(69) イエヌス会士シヨアン・ロドリゲス (João Rodrigues, 一五六一—一六三三 年)。

(70) *Id., Ellogi di capitani illustri*, p. 4. “Non potendo finalmente resistere la robustezza, c’hauea portato da’ boschi alla smisurata libidine, e a souerchi pensieri, s’ammana a morte, e si fa condurre a Fuscini Città deliziosa. Conoscondosi presso all’estremo della sua vita, raccomandanda a Geiaso Signor d’orto Regni, e di nobil sangue, Findeiofi fuo

Figliuolo. Fa rappacificare molti Grandi dell’Imperio, ordina, che se gli fabbrichi vn Tempio col nome di Scinfaciman, che significa nouello Dio dell’armi, e si ritira nelle piu remote stanze del suo Palagio a occultamente morire. Entra a vederlo con ispezial grata il Padre Rodriguez; ma chiude l’orecchio a discorsi dell’Immortalità dell’anima.”

(71) occupollo: 意味の特定に至らず。

(72) Daitusama

(73) *Id., Ellogi di capitani illustri*, p. 4. “Mori di Settembre del 1598, d’anni 64. Fu Taicofana di picciol corpo: e forte, di volto austero, e villereccio, di poco barba, e con sei dita in vna mano. Non hebbe pari in valore, lusinghe, finzioni, inganni, e in acquistarre, e mantener Dominio, per le quali azioni fu appellato il Tiberio del Giappone. Imperò sedici anni, e l’Imperio mori anche con lui, perche Geiaso, premendo le sue vestigie, occupollo, e lasciato il primiero nome, chiamossi Daitusama.”

(74) 註30のバルトリの引用に含まれる下記が該当箇所にあたると。 “Era picciolo di persona, etandio fra Giapponesi, che poco s’alzano in istatura: ma compresso, e membruto, da reggere a ogni fatica; e in vna mano hauea sei dita. Di faretze in volto sozzissime, e horribili a vedere, tal che appunto pareua scoppiato da vna quercia, e homo salutarico, senon che hauea poca barba: e gli occhi bruttamente sporti in fuori.”

(75) *Id., Ellogi di capitani illustri*, p. 5. “Bartholomei Crassi I. C. Aucr. Filij, Taicosama, Japoniae Imperator: Infimo natali, Gestis sublimis: E syluis in Regiam transluit: Prius armentorum custos, deinde Populorum rector. Armis strenuus, rebus agendis valer: A Principe defecit, Principem Principatu orbavit. Decepit, vt regnaret, regnauit, vt deciperet: In bello hostes, sed suae Tyrannidis hostes euerit. Auri audis, Magnatum sanguine madidus. Vicinos vicit, Remotiores terruit. Plurima adeptus Regna, Imperium exiit: Aeterno verè nomine dignus: Si digni aeterno nomine sunt proditores. Discit Rebus in humanis, quantum inconstantia Soris. Ludat, vt exalter, deprimat vquè, caue.” 註の作者、バルトロメオ・クリッソ (Bartholomeo Crasso) はロ



ンソオ・クラッソの息子、文筆家、法律家としてナポリを活動の舞台とし、一六八四年には『著名武将伝賛』に収録された秀吉と家康に捧げた詩を再録した詩集 *Bartholomei Crasso Neapolitani De plantarum dominis elegia, et carmina*, apud Salvarorem Casaldum regium typographum, 1684.) を出版している。

(76) ウィリアートゥス (Virianus, 前一八〇頃—前一三八) は前一五一年、ルシタニア (現ポルトガル地方) ローマ総督の暴政に反旗を翻し、和平と独立を勝ち取るも、和約を破ったローマ軍に暗殺された。『西洋古典学事典』(松原國司、京都大学学術出版会、二〇一〇年) 一七八頁参照。

(77) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 5. “Caroli Andree Simibaldi Equ. S. Iac. Parr. Fau. Romulus, & Cyrus Pastor sublimis in armis A memore ad Regnum duxit viresque gradum. Conspicuo, sed viresque salus de sanguine Regum, A vilis Pastor, Taicosama fuit: Qui quamquam insidijs Regnum usurpauerit, armis Indyrus ille tamen, vt Viriatus erat: Nature fato par nempe inclatut, oris Vnus ab Eois, alter ab Occiduis.” 詩の作者、カルロ・アンドレア・シニバルディ (Carlo Andree Simibaldi) 及びイタリヤの北部、フアエンシアのフィロポーニ・ツカデツィー (Accademia dei Filoponi) の大御所、一八世紀前後を中心に活躍した文筆家である。イタリヤ各地に点在する様々なアカデミーと繋がりを持つところからその知られやすさ (Simone Testa, *Italian Academies and their Networks, 1525-1700: From Local to Global*, London, Palgrave Macmillan, 2016, p. 153.)。

(78) *Id., Elogi di capitani illustri*, pp. 47-48. “L’Antico Nome di questo Imperador del Giappone fu Giasso, e poi secondo l’vsanza di que’ Popoli, appellossi Daifu, e comunemente Daifusana. Naeque nobile, Possessor di’Otto Regni: Doni della Fortuna: ma superò l’altezza della Nascita, l’ampiezza del Dominio, la grandezza delle Imprese, la sua mola prudenza, per cui del Giappone ottenne l’Imperio, quantunque con frodi, arti solite a praticarsi in que’ Regni, doue non son mai azioni illustri senza caligini di vizi.”

(79) *Id., Dell’istoria della Compagnia di Giesu*, p. 448. “Fra Principi Giapponesi vn vnera per nome Geiasso, e poi altrimenti: Daifu... huomo di finissima nobiltà, gran caualiere in armi, e Signor d’Otto Regni, e per tutte insieme queste qualità di grand’huomo, solo possente ad vsurparsi, morto lui, la corona dell’Imperio Giapponese” 「日本の君主たちの中に一人の人物がいた。その名を家康、後に内府と呼ばれる人物である。(中略) 非常に高貴な貴族の出で、偉大なる騎士、八ヶ国の領主であった。彼は既に故人ではあるが、これらすべてを以て、日本の帝権に戴く王冠を篡奪するほど有能な、偉大なる人物の資質ともういふべきであらう。」

(80) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 48. “Ridotto agli vltimi periodi della Via Taicosama, primo Vsurpator dell’Imperio, chiamò a se Daifu, e con parole mischiate con lagrime, raccomandogli Findexori suo figliuolo d’anni cinque, e’l reggimento de’Regni, acciocche qual altro Padre l’allassasse, con promessa, che vna Nipote di Daifu in auenture fosse poi Moglie di Findexori, tutto a fine di maggior sicurezza, deputando anche dell’ordine de’ Partizi, e de’ Citadini alcuni Gouvernatori con fargli giurare agli Iddij del Giappone la fedeltà. Daifu, che altro non desideraua, accettò il peso con mestizia nel volto, e allegrezza nel cuore, e morì Taicosama”

(81) *Id., Dell’istoria della Compagnia di Giesu*, pp. 448-449. “Ma fanciullo di poco oltre a cinque anni, e per si tenera età, inhabile a reggere sè medesimo, non che altrui, douersi pronouedere d’un secondo padre, di tal merito, di tale amore, e fedeltà verso lui, ch’egli non s’auueggia d’hauer perduto, ma sol cambiato padre: E riuolto a Daifu. E tu, gli disse, tu se quel desso: se io non son tale, che tu habbi a vergognarti di sortentrare in mia vece; mentre io mi stimo honorato di cambiarmi in te, e t’elleggo fra tutti, per lo piu leale, e degno, a cui fidare quel che m’è piu caro di me medesimo. Per tanto, accio che tu guardi Findexori (tal era il nome di fuo figliuolo) e’l difenda come tuo, mi spoglio del nome di padre; e a te seco il rinuntio; e per darti verso lui col nome di padre, anche le viscere, la tua nipote, bambina di due anni, sia da questo punto sua

sposa. Daifu, in vdir cosa e si grande, e si del tutto impronisa ad ogni suo pensiero: prima di nulla rispondere in parole, diè in un tenerissimo pianto; e Tacosana anch'egli lagrimò alcun poco, credendo, quello essere effetto di buon cuore, e testimonio di scambievoli amore verso lui, e l'figliuolo. E forse l'era, ma non così ne parve a gli altri, che l'interpretarono, a sfogamento d'vna pura, e schietta allegrezza, per vedersi messa in mano la monarchia del Giappone, che a volentasi conquistar coll'armi, gli sarebbe cosa spargimento di sudore, e di sangue: ... che in apparenza mostrava, della lealtà di Daifu, non ne hausse in suo cuore più timor che speranza" 「しかしながら太閤様の息子は、まだ五歳を過ぎたばかり。まだ年端も行かぬ年齢で、また自身で治めることなどできぬ故、利益と愛情、息子への忠誠を兼ね備えた第二の父を準備する必要に駆られていたの言うまでもない。そのような資質を持った第二の父がいることで、父親が変わってしまうということではあっても、息子には父親を亡くしてしまったというのを当たり前のことと受け取ってはしかなかったのである。太閤様は内府の方に振り向き、「お前が…」と言ひ、次のように続けた。「もしお前がそうだとしても…、私は違うのだ。お前は私の代わりに「息子の父」となることに恥ずかしく思うに違いないだろうが。ただ私は、お前に代わってもらえて誇らしくすら思っているのだ。皆のなかからお前を選んだのは、この上なく律儀で、この私よりも親しまれやすく、信頼に足ると思つたからだ。いずれにしても、秀頼（彼の息子の名前はそのようなものだった）をお前の息子として世話してもらひ、護ってもらうために、私は父という呼び名を取り去り、父としての役割から身を引くことにしよう。父という名も父の情愛も一緒につけて、お前を秀頼に宛がうようにしよう。お前の二歳になる孫は、この時点を以て秀頼の許嫁となるのだ。」内府は不意を突かれたものの、斯様に重大事ゆえ、言われたことすべてに耳を傾け、その都度考えを巡らすのであつた。内府はさめざめと涙を流したかと思つと、なにも答えられなくなつてしまつた。太閤様も頬を薄つすらと涙で濡らしたのだが、こうした

ことが互いの息子に向けられた愛情の証、善良な気持ちによるものと信じて疑わなかつた。内府もおそらくそのように考えていただろうが、他の者たちにとつては、そうは見えなかつた。彼らは、内府による無垢で純粹な陽気さの吐露と、この状況を解釈していた。というのも、内府にしてみれば、武力による日本国の征服は、非常に骨も折れるし、多くの血も流れるものなのに、自らそれを手中に収める姿が見えていたのだから。（中略）外見上は、内府は誠実に振舞つているように見えたものの、太閤様の内心は、希望というよりも不安でしかなかつた。」

(82) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 450, "chiamò innanzi a sé, a girare per tutti i Idiij del Giappone ch'egli però non credeva esserui, prima Daifu, che manterrebbe, poi i tutori che difenderebbono al figliuolo l'imperio." 「太閤様は「[国]維持を司る家康と、息子のための帝権の守護を司る後見人数人を、面前に呼び出し、自分はその存在を信じてはいないものの、日本の全神々に向けて、宣誓させたのだつた。」

(83) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 48, "tutto diedesi al governo, mostrando con occulto fine molti arti di prudenza in beneficio del Pubblico, tirando anche a sua volontà con doni, e vñci buon numero di que', che per potenza, e autorità contender poteangli il Principato."

(84) Gibunosci: 石田三成。

(85) Tzunocani Agostino: 小西行長。一五八四年頃に洗礼を受けキリシタンとなつたが、洗礼の際の詳しい状況はわかつていない。キリシタンであつた父親の小西隆佐や高山右近の影響が指摘されている。

(86) Canghaiaschi: 上杉景勝。

(87) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 48, "Ma perche quell'Imperio è vn Oceano, a cui non manca tempesta, insursero molti contro gli andamenti di Daifu, che operava più, che da Governatore, che sapian di qual finezza era l'Oro della sua fede, e tanto maggiormente prepararonsi al riparo, quanto, che il contraddire al Potente, è farsi

Nimico del Porente. Duisio intanto il Giappone in fazioni, si venne all'armi, senza le quali in quelle parti, ò non s'acquistano, ò non si sosterrano i Dominij. Tra Fuscimi, e Ozaca ragunaronsi d'amendue le parti dugeno mila Combatenti, però guerreggiando Daifù più con l'astuzia, che con la spada; senza esporsi a pericoloso cimento, distrusse primieramente Gibunosci, Capo di fazione, e Motor principale dell'armi, e'l ridusse, priuo d'ogni autorità a vivere in pouera fortuna, e in lontana parte; Ma perche l'ingurie si tollerano da molti fin a tanto, che hà luogo la vendetta, tornò di nuouo in Campo Gibunosci più poderoso con le forze di Tzunocami Agostino, e di Canghecaschi vn de' Tutori di Findexori."

(88) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù, p. 471.* "Morro dunque l'Imperator Taicosama, e come pur tuttauia viuesse, proseguita alcun tempo da' noue Governatori l'amministrazione del publico, giusta le antiche sue leggi, Daifù, con'era fra gli altri, e in autorità il priuo, e in forze il piu possente, signor d'oro Regni, valoroso in armi, e accorto, quanto ne cape in vn vecchio finalmente politico, cominciò a mettere ogni di le branche piu innanzi, per così a poco a poco, di tutor ch'era dell'Imperio, farsene Imperadore. Percio, comperarsi con gratie, e con promesse anche maggiori, l'amore, e la fede de' piu possenti, e con cio fattosi vn basteruole seguito, già piu non curar del pupillo di Taicosama, herede, e successore giurato: Non richiedere di consiglio i noue compagni, anzi dolentisi, e innocanti la giustizia, la fede, e gl'Ididj, minacciarli, di segar loro la gola, se non raccuano. E già tutto il Giappone diuiso, si metteua a fattioni, e in arme, patteggiando altri co' Governatori, altri con Daifusama." 「皇帝、太閤様は死んでしまつたものの、彼がまるで生きてゐるかのやうに、しばらくの間は太閤様の古い決まり事に従い、新たな総督たちが公共の行政を担つていた。内府も他の者たちと同じやうに振舞つていた。彼は権限上のトップで、最も力が強く、八ヶ国の領主にして、武勇の誉れ高く、老獪な鋭い政治眼を以て状況を理解する抜け目なさまで持つていた。そのために内府は自ら皇帝となるべく、次第に少しずつ、帝権の後見人へと触手を伸ばし始めた。

そのために、厚情、より利益をもたらす約束、愛情、より力を持つ者への信頼などにより、次々と買収された。そして、こうしたことと相まつて、太閤様の被後見人、相続人、約束された後継者の世話はもうたくさんだと思われようになつた。内府は、新たな同僚との合議に応じることもなくなり、むしろ彼らは不平を述べようになり、自らの正当性、「太閤様への」信仰を訴えるようになつた。すると内府は、もし黙つて従わぬのなら、打ち首にするぞと、彼らを脅すようになつた。かくして、日本全土は分断状態となり、総督たちはたまた内府様を支持する党派ができあがり、共に武装するに至つた。」

(88) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù, p. 471.* "Hor poiche i Governatori ogni di piu abbassati da Daifù, s'auidero, che contro a forza non ualeua ragione, gridarono all'armi: e all'armi rispose altresì Daifusama, e in pochi di, d'amendue le parti furono in campo, tra Fuscimi, e Ozaca, ducento, e piu mila combattenti. Non si venne però mai a giornata, che Daifù, vsando non men felicemente il consiglio, che la forza, con poco venne al disopra di Gibunosci, principal suo nemico, e primo mouitor di quell'armi, el costrinse ad hauer per buon patto rinunziare il gouerno, e scarico d'ogni publica amministrazione, andarsi a vivere in pace nel Regno di Yomi, ch'era in buona parte suo. Racchetate appena queste prime turbolenze, altre maggiori ne suscito Canghecaschi, anch'egli vn de' tutori, rompendo guerra a' confini de gli otto Regni, che Daifù hauea cola nel Camò. Questi, lasciata in mano a' Governatori Ozaca, il tesoro, e il piccolo Imperadore, accorse a rimediare il pericolo di perdere il suo, mentre cercaua di guadagnare l'altrui. Allora tutti i suoi nemici collegatisi, gli attrauersarono la strada al ritorno, con piu d'ottantamila huomini alle frontiere. Autore di questa nuoua commotion d'armi, e lega, fu Gibunosci, tornato piu che mai fiero dall'esilio al campo. Ma non s'ardi a spiegar bandiera prima d'hauer dal suo perito Tzunocami Agostino: e ve l'hebbe, chiamato da Meaco alla sua fortezza di Sauiama, e ricordatargli la fedeltà solennemente giurata al piccolo Findexori: poi darigli a leggere i nomi de'

collegati, ch'erano i Re di Saizuma, di Mino, di Bigen, e oltre a piu altri, Mordono d'Amangucci con tutta la forza de' suoi noue Regni."「かくして内府に囚まれた総督たちは、力に対して理は価値を持たないと気づき、武力を以て主張するようになった。すると内府様も武力で応じ、時を置かずして伏見と大坂のあいだで双方二〇万の兵士が布陣するに至った。けれども内府は日が暮れないうちに、幸運にも力ではなく合議を用いることで、少数の兵力で治部少輔、つまり内府の主要な敵に優位に立つことができた。最初に武力に訴えたことで、好条件の和約を通して、統治と公共行政の職から降り、近江の国に平和裏に生きて戻るよう彼「治部少輔」は迫られるに至った。近江の国は、彼にとっては好都合の場所であったのだ。このような最初の騒動や他の数々の大事が沈静化するやいなや、「秀頼の」後見人の一人でもう一方の主要人物であった景勝が立ち上がり、内府が彼方の関東で領有していた八ヶ国との国境で戦端を開くに至った。大坂、宝物、小さな皇帝、これらが総督たちの手元に置かれるかたちとなり、内府は自らの所有物を失う危険に対し対策を講じる必要に気づく一方、他に勝利を得る手立てを模索するようになった。かくして敵は全軍を挙げて結束し、前線八万の兵力を以て内府の退路を断った。このような軍事行動や同盟からくる新たな騒ぎの立役者は、治部少輔であつて、蟄居先から戦場へと誇らしく返り咲いたのであつた。しかし、摂津守アゴステイノが行動にでたからこそ、治部少輔は意気揚々と勇敢に出陣したのである。つまり摂津守アゴステイノがミヤコから佐和山城に赴き、治部少輔を呼び戻し、莊嚴たる誓いによる、幼い秀頼への忠誠のもと、両者を結束させたのであつた。後に彼のもとは、薩摩、美濃、備前の王たち、他方では山口の毛利殿が名を連ねることとなり、ここに新たな国々の全兵力が結集した。」

(90) Re di Bigen

(91) Cinagondono: 宇喜多秀家。

(92) *Id., Elogi di capitani illustri*, pp. 48-49, "Contro a questi armossi Daitu, e

quantunque tensesse forze minori de' suoi Nimici, vsci pronto alla battaglia, della quale restò Vincitore, hauendo sudduri alcuni a passare a fauor suo. Mori combatendo Cinagondono Re di Bigen, e restaron prigionieri Gibunoschi, e Tzanocami Agostino, e fu si grande la strage, el timor di molti d'esser condotti a Daifusama, che alcuni per non andarui ad accrescere il trionfo del Vincitore, segaronsi il ventre, secondo la costuma di quelle barbare Nazioni. Mordono Re d'Amangucci fuggito in Ozaca doue potea difendersi, vilmente arrendeoli.

(93) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gienu*, pp. 472-473, "Hor Daifusama, ancorche hauesse la metà meno gente, non perciò sbigotti: ma racconce in parte e in parte e lasciate a fornire a vn suo figliuolo le cose de' Regni al Cantò, calò giu difilato a dare, o ricuere la battaglia, e s'iaccampò in faccia a' nemici: i quali se hauessero consentito ad Agostino il comando di Generale, la battaglia era vinta. Mai collegati comanduano ciscun la sua gente, senza volersi suggerar l'vno all'altro. Così doue tutti eran capo, non faceuano vn corpo. Pur veramente la cagione dell'vniversal loro disfacimento, fu, che in su'l dare alla battaglia, mouendosi bramente a incontrare, di qua Agostino in testa, alla vanguardia, e di là il nemico, certi Signori della lega, già conuenutisi del tradimento, si spicarono dalle loro ordnanze, e seco le schiere che conduceuano, corsero ad vnirsi con Daitu: e fu quella horribile felonìa Giapponese, si improvvisa a' compagni, che come adombrati, stordirono, scompigliaronsi, e stettero su'l dar volta: ... e qui Cinagondono Signore di Bigen, e di due altri Regni, perdè a vn colpo di scimitarra la testa, e le corone, Gibunoschi, e Agostino, accerchiati, e chiusi, si renderono presi. ... Mordono, con tutti i suoi quaranta mila, li riparò ad Ozaca, ma si inulfito, e vnto senza hauer mai combaturto, che sopra giuntonu Daitu, ... "目下、内府様は半分以下の兵力を有しているに過ぎなかつたが、途方に暮れることを託した。そして、戦に受けて立つためにそそくさと進軍し、敵の正面で野営した。敵方の軍勢は將軍の指揮権をアゴステイノに譲つたら、戦で

- 負けてしまった。「敵方の」同盟軍は各々が命令を下し、互いに指揮下に入ることは欲していなかった。つまり、皆が頭となつてしまい、体の部分がない状態だったのである。実際のところ、彼らの全軍総崩れの原因は、戦争に臨むにあたり、アゴステイーノを頭目とした敵方が彼方に見える前線での作戦会議の時間が短く、同盟を結んでいる領主たちの何人かに既に裏切り者があり、彼らは命令や取るべき陣形を無視して、内府に合流すべく走り去つていったことが挙げられる。これこそが戦慄すべき日本流の裏切り行為であった。突如として「内府の」仲間になつてしまふのだから、敵方はおどおどしてしまい、仰天、混乱し、引き返すしかなかった。(中略) ここで備前の領主で他に二ヶ国を持つ中納言殿は、刀の一撃で頭部と王位をなくし、治部少輔とアゴステイーノは、敷かれた包圍網が狭められ、降伏し囚われの身となつた。(中略) 毛利殿は全兵力四方を引き連れて、大坂防衛の任に就いた。しかしながら戦意を喪失してしまつた。内府の不意打ちを食らひ、戦わずして勝利を譲つてしまつたのである。」
- (94) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 472. “qui Ciungondono Signore di Bigen, e di due altri Regni, perdè a vn colpo di scimitarra la testa”
- (95) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 49. “Con questa prosperità di fortuna corse a rouinar tutti i Regni de' Nimici, e in breuissimo tempo diuenne Dominator del Giappone. Indi tolse a' più potenti la Vita, a' Sosperti le Dignitadi, e a tutti suoi affectionati diè premi, e onori, e con tali azioni mouossi Imperadore di sessanta sei Regni. Mantenne, come nato di Nobil sangue la Nobiltà a sua diuozione, diuerso da Tarcosama che nato vilmente, godea dello sterminio de' Nobili.”
- (96) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 473. “Quinci proseguito co' suoi eserciti il corso della vittoria, andò tutto a preclare, e distruggere i Regni de' Collegati: e tra per lo punir de' nemici, e' i premiar degli amici, il nouo Imperadore, o Tiranno che vogliamo dirlo, mutò faccia a tutto il Giappone. Perche quantunque Dafusama non togliesse la vita fuor che solo a tre de' suoi auersari, pur tanto gli aggrauò di miserie, disperandoli d'ogni bene, che quella parte non mansuetidine, ma crudeltà, quasi volesse lasciar loro la vita, sol perche piu scemato, e piu lungo hauessero il morire.” 「勝利の行きつく先は、軍隊を随伴させて「敵方の」同盟軍の国々を掠奪し破壊し尽くすことである。新たな皇帝、我々が言うところの暴君は、敵方を罰し、友人に妻妾を取らせ、日本全土の状況に変化をもたらしたのであった。内府様は、逆徒三名以外の命は奪わなかつたけれども、敵方を惨めな状況へと追いやり、各々の財産を奪つた。こうしたことは、穩健ではなく残酷なように見えた。つまり、ギリギリの生活をさせ、より長く死を味わせるためだけに、命を奪わなかつたのであった。」
- (97) *Cristiana Religione*
- (98) *Id., Elogi di capitani illustri*, p. 49. “Prouò in questi rauoujimenti di fortuna anche le sue vicende la Cristiana Religione, poiche Dafusama amaua per l'interesse, odiuata per la legge, mostruasi co' Bonzi Idolatri: ma come tutto scelerato politico nella sua Legge, agl'Ididi non credeua. Vietò a' Nobili la Fedeltà Cristo, poscia onorò i Vescoui, e que' Padri, che più portauan nel volto, e nell'opere venerazione; ma grand'esca all'incendio della persecuzione agguingeano Inghilesi, e Olandesi, diuenuti più Nimici de' Catolici, che d'Idolatri”
- (99) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 487. “Era Dafusama di religione Pagano, si fatamente però, che non ispasimaua punto d'amore, nè d'Amida, la cui setra professaua, nè di niun altro Idido: politico piu che idolatro, con l'ordinario de' Principi Giapponesi... Quanto alla legge di Christo, e l'odiua, o l'amaua, l'vno, e l'altro per interesse.” 「内府様は異教徒であつたが、実際のところ、愛情も阿弥陀も、自らが公言してやまない阿弥陀の宗派にも、他の異教神にすら執着していなかつた。偶像崇拜者というよりも、日本の君主たちの慣習として政治的に支持していたに過ぎないのだつた。(中略) キリストの教えについて言えば、双方を利益と天秤にかけ、ひどく嫌つたり、愛したりしていたのである。」

(10) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, p. 732: "Chi artizzo, ed accese in distrution della Fede, lo sdegnò, che Daifusama si conuata nel cuore, furono Heretici, e Idolatri: sa Iddio quai di loro fossero i peggiore: il certo è, che gli vni, e gli altri eran pessimi. Quegli, Olandesi e Inglesi:” 「キリスト教信仰を破壊へ導くやう扇動し、焚きつけていたもの、内府様の内に秘めていた軽蔑の先にあるもの、それは異教徒たちであり、偶像崇拜主義者たちであった。彼らの異教神は悪人であり、彼らが双方ともに最悪なのは間違いない。つまりオランダ人とイギリス人である。」

(101) rouinollî turti  
 (102) *Id., Ellogi di capitani illustri*, p. 49: "Vedendo le discordie de' Governatori, e de' Rè confinanti, rouinollî turti ò con la forza, ò con l'astuzia, perche benchè fosse d'animo generoso, non sopportaua, ch'altri s'aggrandisse con quelle medesime arti, con le quali egli haueasi acquistato l'Imperio”

(103) Xongun  
 (104) Colpo: 打撃、銃声、突発の行為、不意の出来事。

(105) Fococci

(106) 国松

(107) Sorunga

(108) 「新約聖書 マタイ伝第二章」に出てくる「悪い農夫の譬」この譬では、イエスの教えを理解しない神の民から神の国は取り上げられ、それが異邦人に与えられるというくだりがある。異邦人、いわゆる日本人キリシタンたちが、イエスの教えを従順に守るがゆえに、逆に迫害の憂を目にしよう状況を強く印象づけるために、挿入されていると思われる。

(109) *Id., Ellogi di capitani illustri*, pp. 49-50. "Corra l'anno 1615, quando conoscendosi graue d'età, e infermiccio, desideraua stabilir la Corona su'l Capo di Xongun suo Primogenito, e perche Findetori a cui hauea vsurpato l'Imperio erasi fortificato in Ozaca, non senza speranza di raquistar l'Imperio paterno dopo la morte di Daifusama:

Questi prendendo il colpo, andò ad assediare in Ozaca: ma nulla hauendo operato con la forza, volossi ag'inganni, rapacificandosi insieme con giuramenti agli Iddij del Giappone, sottoscritte ancora le condizioni della pace col sangue d'amende. Serui l'accordo del Vecchio per ingannare il Giouane, perche Daifu, hauendo oritro tradimento segreto, con poderoso esercito prese Ozaca, doue l'vecchio stancò le destre, non la volontà degli Vecchiori, non perdonandosa sesso, ad età, à buoni, à Rei, perdendosi anche tra le fiamme il gran tesoro, che in quella forza haueua vn tempo raguato l'aurissimo Taicosama Padre di Findetori. Saluossi per fortuna Findetori con la fuga ne' Regni di Fococci, ed essendo rimasto in man del Vincitore vn di lui figliuolo d'anni sette, perche a sangue reale, che può aspirare a Dominio da' Tiranni non si perdona: questi, benchè fanciullo, vedendosi condotto ad essergli segata la gola, generosamente chiamò spergino Daifu, il quale trionfante d'hauer distrutta Ozaca, andò a Sorunga: ma poco allegro della vittoria per essersi Findetori saluato. Comandò poi, che s'abbattessero tutte le Fortezze del Giappone, e contro a Cristiani, e Coltiatori della Vigna di Cristo vsò aspri rigori, sicche col molto sangue de' Barbari, andò non poco sangue de' Fedeli.”

(110) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, pp. 824-826. "Daifusama, sentendosi horamai per vecchiezza cascare sotto piu di settantadue anni, di troppo mal cuore moriuà, perche non lasciava si ben ferma in capo al Xongun suo primogenito, la corona della monarchia Giapponese, ... non accadea gran pensati per rinuenirlo: ciò fu, ment' egli era viuò, e hauea la scimitarra in pugno, mozzar le mani a quanti, morto lui, le potessero adoperare contro alla vita di suo figliuolo e vedere Findetori, a cui non hauea fatto nulla con togli la corona giustamente douuta gli, se anche non gli toglicua la testa... Da tutto ciò gli pareua continuo: sentirsi dire che l' Imperio, morto lui, ricadrebbe dal figliuolo suo padrone, a quel di Taicosama herede. Cercò dunque di trarlo fuori d'Ozaca: resigli per tutto intorno lacci, ... il che veduto, Daifusama, lasciò: come disutile, il piu giuocare d'astutie, e si diè a far tutto da vero con la forza,

accorrendo a serrar Findelori in assedio... senon che Daifusama, destrissimo in usar la frode doue non giungea il valore, mandò per suoi huomini sparger voce, fino a farlo vdir, e credere a Findelori, che v'hauea tradimento in Ozaca: onde il giovane si lasciò ageuolmente condurre a trattar di pace, men vantaggiosa, che a lui vincitore non si conuenia: Se ne stipularono i patti, sottoscritti col sangue d'amendue le parti, e solennissimamente giurati per tutti gl'Ididi del Giappone, de' quali Findelori era diuotissimo, Daifusama punto non ne credea; onde poi così fedelmente osseruò le promesse, come le hauea sanamente giurate." 「内府様は七十二歳を過ぎて老化による身体の衰えを感じていた。心臓の状態も非常に悪く死にかけていた。というのも、彼の長子を將軍の座、つまり日本の王国の王座に据え置いていなかったからだ。(中略)内府様には次のような案が頭に浮かんだのであった。それは、彼が生きたまま、刀を握りしめ、両手を切断する。その両手を息子の人生のために使い、秀頼を殺せたらと。内府様には秀頼から王座を奪う大義が無く、頭を切り落とすこともできないのであった。(中略)そうした全体的ことから内府様は次のようなことが言われているような気がした。「内府様の死後、帝権は、帝権の庇護者たる息子のもとから、太閤様の相続人である秀頼のもとに渡ってしまう」と。内府様は、秀頼を大坂の外に連れ出して、彼の周囲に罠を仕掛けられはしないかと模索していた。(中略)内府様は様子を見ることにした。無能なように見えるが、彼は何よりも術策を弄するのである。すると、突如として駆けつけ、秀頼を包囲し、力攻めに転じたのである。(中略)しかしながら、内府様はこの上なく狡猾な人物であつたゆえ、武勇に訴えることはせずに、欺瞞工作を施した。つまり、複数の人間を使つて、秀頼の耳に入る程度にまで噂を拡散したのであつた。それにより、大坂では裏切り者で通つていた秀頼を信用するようになつたのである。すると若君は、和平交渉の席にまで、易々と出てきてしまつたのである。若君は勝者と言えるほど有利な立場ではなかつたにもかかわらずである。両者は互いの血判状と、日本の全神々の面前での敵

かな誓いをもちつて、和平を締結した。秀頼はその和約を信じ切つてしたが、内府様はとうとうと信用してゐなかつた。すなわち、秀頼は神聖なる誓いかのように諸々の和約を誠実に遵守してつゞけたのである。」

(11) *Id., Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, pp. 828-829. "Cio fu, che appena Fideiori hebbe il piè fuor della Fortezza, che certi pochissimi suoi seruidori vecchi, a quali ne hauea raccomandata la guardia, vi mise fuoco in piu lari (tradimento, che Daifusama hauea da essi comperato a gran denari) o in leuarsene un fumo e le fiammea vira di Fideiori: iro già al quanto oltre egli batendosi, sclamando alle stelle, diè volta, e co' suoi dietro, rinfusi, e disordinati, v'accorse a campar dall'incendio la madre, e'l figliuolo, e se nulla potea del tesoro, ch'era vna ricchezza, che altrettanto non ne hauea tutto il Giappone... Ozaca, la Città, e la Fortezza, presa da victor, rubata, corsa, messo tutto l'haure a ruba, gli habitatori al ferro, gli edifici al fuoco, in poco piu di cinque hore fu cenere. Chi il vide, e ne fu anche a parte, scriue, che al pazzo discorrimiento de' persecutori, e de' peseguitati, alle diuerser gnda, e stridori, e tumulto de gli vini, e de gli altri, alla strage, tra de gli vecchi, e de gli arsi vini, e all'horribil diffondersi delle fiamme, portate da vna furia di vento, che allora appunto trahua, non potea rappresentarsi sopra la terra imagine piu espressiua dell' inferno. Il tesoro di Fideiori, ch'era lo spoglio, che di tutto il Giappone hauea fatto per tanti anni, l' auarissimo Talcofania suo padre, tutto rel diuoraron le fiamme; perdita inestimabile, senon quanto pur se ne trasser di poi le masse dell' oro: e dell' argento, colari, e confusi... nè sol di Fideiori, e de' suoi intimi; e capitani, che si ripararon ne' Regni del Fococou... Ben generoso fu il morir che fece un figliuolo di Fideiori, fanciullo di sette anni, che in poiger la gola a segargliela fu gli occhi di Daifusama, hebbe cuore di rinfaccargli la fellonia dello spergiuo, rota sotto fede la pace all' innocente suo padre. E Daifusama all' incontro, rimproverò a Fideiori la sua pazza pietà, ..." 「秀頼は、護衛を任せている年老いた従者数人を従えて城外へ出るやいなや、広範囲に火の手が上がつた。(内府様は大金をつかつて彼らを買収したのである)秀

頼の眼前に飛び込んできたものは、立ち上がる煙と火柱であった。彼は多数の敵と戦う一方で、天を仰いで叫び、引き返し、後方にいた部下とともに混乱のなか撤退した。日本中の宝をかき集めても、なおもそれを上回るほどに豊富にあつた宝を持ち出すことはできないが、母と息子は火災から救い出せることに秀頼は気づいた。(中略)大都市であり城塞のある大坂は、勝者のものとなり、窃盗、掠奪に晒され、ある物全てが盗まれ、住民は剣を突き付けられ、建物には火が付けられ、五時間も経たないうちに灰燼に帰した。この状況を見て、以下のように書き残している者がいる。「迫害する側、される側の狂つたような口論が繰り広げられ、方々から叫び声や鋭い音、双方で揉めている喧騒が聞こえてくる。殺された死体、生きたまま焼かれた焼死体といった大虐殺の光景が広がっている。恐るべきことに、今まさに吹き上がった突風に煽られ火の手が広がり、地上の光景は地獄と言う以上になんと表現してよいかわからない有様であった。」と。没収された秀頼の財宝は、この上ない吝嗇家で、秀頼の父であつた太閤様が、長年に渡つて日本中から集めてきたものであつた。これら全ては火災に飲み込まれていったのだつた。失われた品々は評価できないほど莫大で、もし失われていなければ、ごちやまぜになつた大量の金銀がどれだけ出てきただろうか。(中略)やはり秀頼だけは、側近と武將とともに北国の国々で匿われることとなつた。(中略)秀頼の息子は、齢七歳の童子であつたが、天晴なるか勇壮に散つていつた。内府様が目の当たりにしたものは、首を差し出し、まさに首が刎ねられようとしている秀頼の息子の姿であつた。息子は、虚偽の宣誓による裏切り、すなわち無罪の父との和平が信頼のもとにあつたにもかかわらず破棄されたことを、内府様に対し面と向かつて非難するほど、肝が据わつていた。内府様は、息子と対峙すると恩着せがましくも温情をかけた。(後略)」

(112) Luiz Pinheiro, *Relacion del suceso que tubo nuestra Santa Fe en los reynos del Japon*. [imprint: lacking], 1617. (国際日本文化研究センター蔵)

(113) *Ibid.*, pp. 507–509. “Luego que salio, algunos de sus antiguos soldados, cohechados (como se entiendo) con promessas del Emperador, y juntamente sentidos de que hiziese mas confianza de otros visosnos, y mas nuevos en la militia, pegaron fuego a la fortalesa, con que el Principe, y muchos de sus Capitanes temieron semejante traycion en el exercio, y assi se recedua cada vno del amigo, como del enemigo y como el Principe tenia en la fortalesa su madre, y mugerm fue fuerza acudir les con algunos Capitanes: ... fue fama, per falsa, que el Principe aua muerto, antens se retiró con su madre, y muger al Foccosu. ...” 「それから秀頼は、古参兵数名を引き連れて城外へでた。皇帝と密約を交わした内通者たちは、秀頼が新参者その他の多数の兵士たちを重用しているという認識を持つており、城塞に火を放つたのであつた。王子と武將の多くは同様の裏切りを恐れており、自軍内で敵か味方か区別がつかず不安に陥る有様で、城内には母と妻がいたため、数人の武將とともに武器を持つてすぐに駆け付けられるようにしていた。(中略)有名な話ではあるが、王子が死んだというのは嘘である。それどころか彼は母、妻とともに北国へと落ち延びた。」

(114) Anthony Farington, *The English factory in Japan 1613–1623 Volume 1*, London, The British Library, 1991, pp. 376–377. フレデリック・クレインス博士のご教示による。

(115) NH 276, fos. 21v–22r. (ハーグ国立文書館所蔵) フレデリック・クレインス博士のご教示による。

(116) Arnoldus Montanus, *Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische Maetschappij in ʼs Vereenigde Nederland, aen de Kaisaren van Japan*, Amsterdam, Jacob Meurs, 1669. (国際日本文化研究センター蔵) フレデリック・クレインス博士のご教示による。

(117) Erasmus Franciscus, *Neu-pultrter Geschicht- Kunst- und Sitten-Spiegel ausländischer Völker*. Nurnberg, Ender, 1670. (国際日本文化研究センター蔵) フレデリック・クレインス博士のご教示による。



(118) Virtù

(119) *Id. Elogi di capitani illustri*, p. 50. “Giuna l'ora della sua morte essendo d'anni 73. volle per testamento esser seppellito nel più alto Monte del Giappone, per trovarsi com'è dicea, più vicino al Cielo, e acciò che lui con l'occasione d'un Idolo si venasse da' Posteri la sua persona. Morì del 1616. Fu di mezzana statura, spaziosa fronte, occhio torbido. Habbe Virtù: ma superata da' vizii, audo, generoso, prudente, astuto. Vinse più col consiglio, che con l'armi, mostrò credenza agl' Iddij; ma degl'Iddij bulossi. Lasciò il Figliuolo dell'Imperio, e delle contenzioni Errede.”

(120) *Id. Dell'istoria della Compagnia di Gesù*, pp. 838–839. “Dafusama dunque vecchio d'horamai setantatré, se non più anni, e colmo di quante sceleraggini capono in vn'huomo senza Dio, Iddio il chiamò a rendergliene la douura mercede, fra quegli, vn de' quali egli stesso morendo protestò d'essere, non huomo, disse egli, ma Spirito: e cio per ambitione di farsi annouerare fra la più nobil razza de' Cami, de' quali gli altri furono huomini, questi, demoni mezzo domestici, che tal volta si fan vedere a que' ciechi idolatri, ed essi consacrano loro Tempi, e ve gli adorano in grado di Semidei. Il teneme che si fece alcun tempo sotto gran segreto celata la morte, diè assai che suariar: l'vn dall'altro, a quegli, che ce ne volsero scruere il di preciso: e benchè poco monti sapere in che di appunto il mondo perdesse vna bestia, pure i più s'accordano, che nel diceresimo di della quarta Luna, cioè nel primo di Ginguo del 1616. Il suo corpo, ordinò egli per testamento che gliel seppelissero vicinissimo al cielo, cioè fu la punta d'vna delle più eleuate montagne che sia in Giappone, nonche in Conzuche, dou' ella è, e si chiama Ninguò, tre giornate lungi dalla Corre di Iendo.” 「年老つた内府様は齡七三歳を目前としていた。悪辣非道が蔓延る神 [Dio] なき人の世。そのなかで彼は頂点に立った。異教神が彼を呼び、しかるべき褒美を与えた。死にゆく彼は言うのであった「私は明言しよう、私は人ではない。魂そのものである。かつて人間であつた神々には、最も高貴な一族に並べられたいという野望があつた。そのため、このような親近感を覚える悪魔たちは、

時折盲目の偶像崇拜者として姿を現し、寺院を捧げたのであつた。そこで彼らは私を半神に列し、崇めるようになったのだ」と。少し経つて、内府様は十分に趣向を凝らしつつ、悠然として静かにひっそりと息を引き取つた。周囲の者はお互い、正確な状況を記したいと思つてはいたが、世界から一人の愚か者がいなくなつたという程度にしか知れ渡らなかつた。皆の見解が一致するところでは、太陰曆一七日目、すなわち一六一六年六月一日に亡くなつたとされてゐる。内府様の身体は、彼がかつて遺言で遺したように、天に非常に近い場所に埋葬された。すなわち、日本に小高くそびえる山の一つ。そこは江戸から三日ほどかかり、大権現とも日光とも呼ばれる。」

(121) *Id. Elogi di capitani illustri*, p. 51. “Caroli Andree Sinibaldi Eq. S. Iacobi. Chyfarum Imperio potitur, ferroque potenti. Belligeras gentes Dafusama metit. Legitimum heredem sternit, Regisque sequaces Opositos iugulat, proximaque arma domat. Nostros, aque suos inuoluit funere Mystas: Non vno, aut multis credulus ille Deis. At prudens tamen, & valer; vt virtutibus aquet Tor vitia, huic quoties expedit illa sequi. Alo in monte statim moriendo iussit humari, Esset vt aethereo proximus ille Polo. Stultus, qui nescit; quòd non scandatur Olympus Corpore, sed pura mente, animoque pio.”

(122) *Id. Elogi di capitani illustri*, p. 51. “Bartholomaei Craffi. I. C. Nobilit, acri animo, celsi sub vertice montis Se condi iussit; Dafusama ferus; Mortuus, vt caelo, Diuisque propinquior esset; At sua barbaries, turpior inde patet.”

